
鋼鉄花

樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鋼鉄花

【Nコード】

N7374U

【作者名】

樹

【あらすじ】

2031年、イタリア・ナポリ。貴族の出身ながら、父の仇敵に一族を滅ぼされ、自身はマフィアの愛人として囲われる身となった女、カロリーネ。彼女は自由を求めて逃げだすが、追っ手によって殺害される。

その数日後、裏社会を取材する男装のフリーライター兼カメラマン、キアラは、取材中に息を呑むような美しい鎧武者と遭遇する。その正体は――。

そして、アンドロイド『鋼鉄花』の一派『Psyche』と『At

h e n a』の戦いが始まる――。

相も変わらず、（色々な意味で）えげつない描写が多いです。たまに不道德的なことも書きやがりかねません。作者も注意しますが、予めご留意下さい。

投稿完了したブツも、たまにいじくったりしますので、お時間があれば読み直してやって下さい。

学生なもんで、生存が危ぶまれるほどのブランクが空く事がしょっちゅうあります。

第零咲 鋼鉄花（前書き）

ついに『第六世界』新章スタートです。
なんかいきなりやばい始まり方ですが、通常運転です。

第零咲 鋼鉄花

「Caroline」

「待ちあがれこのクソアマ!!」

「鬼ごっこに付き合ってやるのも今の内だぞ!!」

夜のナポリに怒号が飛ぶ。

明らかに堅気ではない男たちが追うのは、それはそれは美しい女であつた。

歳は20ばかりか、美しい長い黒髪に大きな茶色の瞳、白い肌の、小柄だが肉感的な体つきの女。

ただ、豊かな胸を封じるコルセットにきれいな太股がスリットから覗くスカートにガーター、その色に合わせた黒いジャケットにヒールの高いロングブーツといった、どこからどう見ても一般的なイメージの娼婦そのものな衣装は難ありであつたりする。

彼女の名前はカロリーネ・フォン・メンデルベルグ。

——かつては、第三次世界大戦後に誕生したドイツ二大貴族の内の1つ、メンデルベルグ家の令嬢だつた女だ。

だが、一族は二大貴族のもう一方、ヘルメスベルガー家との間に起きた内乱、東西戦争で敗北した。

当主は反逆した家来に暗殺され、その妻子は捕縛、離散させられた。その内、末娘の彼女はその美貌を高く買われ、ナポリを牛耳るマフィアの1つ、マルディーニ・ファミリーのボスの愛人として囲われる身となつた。

しかし、彼女はその待遇にうんざりし、自由を求めて飛び出した。その足取りは決して一般的な元お嬢様のような弱々しいものではなく、むしろ空襲・原爆・その他モロモロのせいで崩れ、そのまま放置された家々を尻目に新たに建てられたビルの上を飛び移っている。

——が、

「うわ……」

青ざめたカロリーネは、その足を止めた。

彼女が飛び移ったビルは、一方向を除いて大通りに囲まれていた。そしてさらに、

「——やっと思い詰めた……」

舌打ちして振り返ると、そこには追っ手共が大集合していた。

彼女は今、ビルの屋上の端の端に立っている。

フェンスは無い。

追っ手の一人が、静かに言う。

「——もう一度言う。これが最後の情けだ。このまま大人しく戻るというなら危害は加えん。しかし、もし逆らったら——」

男達が、一斉に拳銃を取り出す。

「さて、どうする？ 10、9、8……」

カロリーネは迷った。

もう二度とあそこには帰りたくなかったが、死にたくはなかった。時間も無いようだ。勝手にカウントダウンが始まっている。

覚悟して、口を開く。

「私は——」

しかし、時は残酷だった。

「——時間切れだ」

轟音が響き渡る。

「——っ！……」

鉛の弾が、カロリーネの脚に、腕に、腹に、左胸を抉る。

彼女の口から鮮血が溢れ、風穴と共に白い肌を紅く染める。

そして、彼女の体は後ろにくずおれ——。

破裂するような音が街中に轟いた。

彼女の体は、地面に強かに叩きつけられた。

しかし、彼女の息はまだ途切れなかった。

（——生きたい……力が欲しい……）

（力さえあれば、マルディーニも、ヘルメスベルガーも、そして――）
と、

「――なかなか骨がありそうですね、貴女……」
低い、澄んだ女の声が聞こえてきた。
少し意識がはつきりする。

そこにいたのは、短いさらさらの黒髪に大きな濁りの無い淡褐色の瞳の、少々小柄だが色白でグラマーな体を白い軍服で包んだ、大人の色気溢れる浮世離れした若い女性であつた。

「私の声、聞こえますか？」

その微笑みは、意外にも子供っぽかつた。

「貴女、仲間は欲しいですか？」

聞き慣れない言葉に戸惑いつつも、頷いた。

頭が痛い。思わず顔を顰めた。

「では、力は欲しいですか？」

もちろん、即答した。

「そうですか……」

なぜか女性性は顔を曇らせた。

「では、これが最後の質問ですが、ここで頷くと、貴女は否応なしに戦いの世界へ巻き込まれることになるでしょう。そればかりではなく、人間とは似て否なる存在になる。――それでも、貴女は生きたいですか？」

少し迷う。

だが、力や生の渴望の方が遙かに勝っていた。

そして彼女は、最後の力を振り絞って、頷いた。

直後、カロリーネ・フォン・メンデルベルグは、20年という短い生涯を閉じた。

「Maldini」

その翌日、マルディーニ・ファミリーのボス、アントニオ・マルディーニはいらついていた。

逃亡した愛人、カロリーネが射殺されたことはどうでもいい。顔はともかく体であの女に勝てる女は捜せばいるだろう。

しかし、その報告を寄越した連中が1人として帰って来ない。

悪い事に、そこには幹部候補が何人が含まれていた。

「どうした？他の連中のシマに邪魔したという事はないだろうが…

…」

心当たりは、無い。

——いや、ある事はあるが、可能性は低いだろう。

というより、考えたくなかった。

「あの」連中を敵に回したとは。

「……む？」

その時、彼は気付いた。

さつきまであれほど騒がしかった向こうの部屋が、今は水を打ったように静まり返っている事を。

「さすがに気味が悪いな……」

手に嫌な汗が滲み始める。

意を決して、ドアを開ける。

その先には闇があつた。

電気が点かない。電球自体が破壊されているのだから当然だろう。懐中電灯を手に取り、部屋を照らした。

そこには、首を落とされ、人形のように転がる部下たちの姿があった。

一面が紅く染まっている。

そしてその中心には、鍬形くわがたを打った兜を被った赤糸絨あかいとおどしの大鎧姿の武者が、黄金の太刀を手に静かに立っていた。

その美しい太刀には、血糊ちのりがべつとりと付着していた。

「——ふむ、そちらにおつたか……」

武者は低い声で呟く。

しかし、明らかに若い女性のそれであった。

呆然としていたマルディーニは、そこで冷静さを取り戻した。

「ふん。何だ、女か」

目元はよく見えないが、相当な美人のようだ。

それを確認し、少し余裕を見せられるようになった。

「お嬢ちゃん。これは少々やり過ぎだろう？ え？ 私が誰だか分かっているのかね？」

だが、女武者は、懐紙で血糊を拭った太刀を構えた。

「フン、馬鹿な女だ。こっちは銃を持っているというのに」

懐から銃を取り出し、構えた。

と、

「——そなた、かような娘は覚えておるか？」

再び女武者が静かに言う。

そして、彼女はくいつと兜を上げた。

その露わとなった彼女の顔を一目見るなり——マフィアのボスが恐怖に身を凍らせた。

背中を冷や汗が伝う。

彼は、懐中電灯も銃も取り落とし、ガタガタ震える手で女を指さした。

「お、お前は……！」

女はそんな男をジロリと睨むと——太刀で男の首筋を薙いだ。

首が、ゴトリと落ちる。

それを見た武者は、ただ満足気に笑った。

第零咲 鋼鉄花（後書き）

いきなり飛ばしちゃいました。

今回はもしかしたら、前作よりも色々な意味でエグくなるかもしれないんで、うつすら覚悟しておいて下さい。

登場人物リスト（前書き）

相も変わらず、更新する可能性大ですが、一応うpしときます。

登場人物リスト

取材者

○キアラ・デルヴェッキオ

●語り部。黒髪短髪に茶色の目の男装の麗人。口元にホクロがあったりする。長身で男らしい体格。

●雑誌『Curiosare』で裏社会についての記事を掲載しているフリーライター兼カメラマン。23歳。

●どこか殺伐としたドライな人間だが、美しい物はカメラに収めないと気が済まないタチ。

カヴァリエーリ研究所

○カロリーネ・フォン・メンデルベルグ

●『Psyche』の前線担当で斬り込み隊長。長い黒髪と茶色い瞳の絶世の美女。小柄だが大人びた顔立ちでスタイルも抜群。外見年齢20歳。意外にワイルドなお嬢様。

●超人的な身体能力を持ち、知略にも長ける。異常に身軽で、常人以上の跳躍力や刀さばきを見せる。

●表人格は無口でクールだが、時々激しい一面を見せる。裏人格は冷静で優しいが感情に走りやすく、涙もろい。

○ガウエイン・ウォリック

●『Psyche』の前線担当でカロリーネの良きパートナー。少々肌の色が白っぽいが黒人の男性。引きしまった肉体を持つ大柄な青年で、歌舞伎役者みたいな凛とした上品な顔立ち。外見年齢23歳。

●怪力の持ち主で薙刀を武器としてよく使うが、たまに徒手空拳で戦ったりもする。

●表人格も裏も、実直で忠義心に厚く、少し荒っぽいが勇猛果敢である。反面頭でっかちで繊細な一面も見せる。

○イレネ・モルゲンシュテルン

●『Psyche』の暫定リーダーで、生前は開発者であるシュタイナー博士の娘であった。人妻。短い黒髪に大きな淡褐色の瞳の、少々小柄だが色白でグラマー大人の色気溢れる女性。外見年齢は26歳だが、実年齢ははっきり言ってババア。

●軍の指揮は苦手だが頭の回転自体は速く、身体能力も何気に高い。

●表人格も裏人格も、大人っぽいようできて実はまるっきり反対だったりする。おっとりしてるかと言うと、そんな事は全然ない。むしろせっかち。素は明るいが感情が激しく、異常なスピードで泣く。繊細だが、相手には良い事悪い事ズバズバ言ってくる。

○ロッテ・モルゲンシュテルン

●イレネの養女で10歳の幼女。『Eve』の一人。ライトブラウンの髪とグリーンの瞳の小さな少女。

●表人格は純粹無垢で明るく、子供っぽい。裏人格は高貴で上品、気丈で気が強い肝っ玉母ちゃん。表と裏は親子のような関係である。

○ロビン・ウォルトン

●『Hestia』から引き抜かれた救護担当。『鋼鉄花』の治療（修復）を完璧に行えるだけでなく、人間の治療も出来るすごい人。セミロングの栗毛に茶眼の女性で、いつも白衣を着ている元医者。外見年齢25歳。

●表は清楚で優しいお姉さん。裏人格ではさらに芯の強さと行動的な一面がプラスされている。

○セルジオ・カンパネッラ

●『Serious』から引き抜かれた参謀。栗毛の短髪に碧眼の男っぽい女性というか傍から見たら完全に男。女扱いが嫌い過ぎて名前まで男にしてみましたくらいだから当然か。外見年齢は19歳だが、仮に生きてたら何歳になるかは分からない。経歴が一切不明なのだ。

●普段は『Psyche』住居棟の警備をやっている。そのせいか、常に警備員室に引きこもっている。

●ゲリラ的作戦が得意。しかし、放っておいたら段々作戦のベクトルが下品な方向に行ってしまう。

●表人格も裏人格も性格が何気に男前だが荒っぽく、律儀と言うか曲がった事が大嫌いな性格。元ですらないヤンキー。

○ベネデット・カヴァリエーリ

●カヴァリエーリ研究所長でシュタイナー博士の旧友。『Hestia』の開発者でもあり、『Psyche』の新規作成は彼の仕事。60歳で既に白髪交じりの髪で、目は灰色、少々小柄だが知性を感じるお爺さん。

●穏やかな性格で、親友の娘のイレネら『Psyche』数人からお尋ね者のアッシュまで受け入れ口が広い。

『Olive Branch』

○アッシュ・クロード

●『Olive Branch』代表。金髪碧眼の、透き通るように肌が白い美青年。ただし、少し大人っぽい顔立ちになり、身長も平均並みになった。25歳。

●正義感が強く、心優しい。今や荒波に揉まれて冷静沈着で気丈な若者になった。意外にドライな所も。

●嗅覚が犬並みに強い、何気に強い。さらに頭の回転速度も速くなった。

○ジャクリーヌ・オリヴィエ

- 『Olive Branch』の副代表で元娼婦。アッシュの彼女。赤毛に青い目の、スタイル抜群で胸の大きい絶世の美女。しかし気丈で、下手すれば新兵より強い。足も何気に速い。射撃も得意。28歳。

- 小さい子好きで、アッシュにアプローチを掛けてくる。人をからかうのが大好き。何だかんだ言って面倒見が良い。

○マイリー・クロード

- アッシュの妹。金髪碧眼の、小柄だが締まった体つきをした気の強そうな声の低い美人。24歳の医者だが、暴力は改善されていない。

- 男勝りで気風が良い。曲がった事は大嫌いで気性が荒い。男らしく、兄並みの戦闘能力と怪力の持ち主。口より先に手が出る。

○カテリーナ・ブロンツァーノ

- アッシュの友人。20歳。ウェーブのかかった栗毛の豊かな髪にヘーゼルの瞳の、肌が褐色見を帯びている美女。エキゾチックな美女。

- 明るく面倒見が良く、意外に気丈。だが怒らせると激烈に怖い。
- とてつもない怪力の持ち主で、ヘタリア軍でも異例中の異例な勇敢な娘。危険人物。23歳。

○石原剛

- 日本人武器商人でアッシュの協力者。ボッサボサの髪と茶色のコートが妙に胡散臭さを醸し出しているガリガリの中年男。元は第三次世界大戦で活躍した航空自衛隊（現：日本国空軍）のエースパイロットだったが、第三次世界大戦で足を失って引退した。今は右足は義足である。42歳。

● 飄々としているが敵には冷酷。しかし慣れ親しんだら色々と面倒を見てくれる。目的のためなら手段を選ばない。

○ ミハイル・J・レブルスキー

● 石原の助手。21歳。暗褐色の髪に琥珀色の目の美少年。

● 両親を殺したアッシュの父を憎んでいた（過去形）。情緒不安定で時々パニックを起こしていたが、もう完全に落ち着いてたりする。今じゃ随分とおっとりしちゃった。

『 Athena 』

○ 九度山^{くやま}信乃^{しの}

● 戦闘部隊のルーキー。槍使いで、十文字槍を自在に操る強者。

また兵法に通じており、知略の面でも侮れない。黒髪茶眼の玄人然とした大和撫子。スタイル抜群。

● 表人格も裏人格も性格は激しい性格で負けず嫌い。しかし実直で努力家。

ナポリ市警察

○ ルートヴィヒ・カンナヴァーロ

● ナポリの警察官で、サンタ・ルチア教会に居候中。黒髪茶眼の、どこか高貴さの漂う美青年。かなり小柄で、キアラ曰く「チビ」。両目に泣きぼくろがある。24歳。

● 生真面目で思いやりのある、信心深い青年。正義感に厚く、警察としての責務の為ならいかなる自己犠牲も厭わない覚悟を秘めている。

○ カルロ・アンドレッティ

● ルートヴィヒの後輩であり幼馴染。クセ毛の茶髪に淡褐色の瞳の長身の青年。ルートヴィヒとは25センチ差（彼自身は180センチ）。キアラ曰く「ノッポ」。

● 軽そうで実際軽い女好き。明るく少々の上ではへこたれない。

○ ベルンハルト・モルゲンシュテルン

● イレーネの旦那。28歳。ライトブラウンの髪にブルーの目の、長身で筋肉質な体つきの青年。凜とした男前な顔立ち。

● 正義感溢れる好青年。優しく誠実で、かつ勇敢である。体術の使い手だったりする。

その他

○ エドアルド・ヨハネ・カナヴァーロ

● ルートヴィヒの養父で、医者兼サンタ・ルチア教会司祭。密かに「カトリック教会最悪の異端者の1人」と言われている。栗毛にアンバーの瞳のいかにも賢そうな紳士。50歳。

● 科学と宗教の両立という持論を持つ上、大人げも無く反骨精神旺盛で、不条理と感じたら誰に対しても反論する、ある意味強固な意志を持った男。とにかく曲がった事が嫌いで、あくどい輩に対しては説教も厭わない。反面、非暴力主義で慈愛に満ちた人間でもある。

● バチカンから目を付けられ弟子もいないが、持論の筋は通っている、地元の間には慕われている、慈善活動の功績が大きいなどの理由で破門は免れている。

○ エカテリーナ・ペトリヤーコーヴァ

● 『Athena』の1人ではあるが、何らかの不都合が原因で『種』が入り込んでいない「出来損ない」で、『親株』も存命という変わり種。セミロングでサイドを三つ編みにした赤毛とグリーン

の瞳が特徴の17歳の美少女。

- 根は大人しいが自身が無く、それを隠すように激しい気性であるかのように装っている。懐いたら従順。

登場人物リスト（後書き）

とりあえず今日はこのくらいにしておいてやろう。
また後々更新します。

第一咲 復活花（前書き）

さーて、もう試験近いですなー（涙）
今回からようやく本格始動ですよ。

第一咲 復活花

「Chiara」

どうも、フィリベルト——いや、備忘録でまでそう名乗らなくても良いだろう。

改めて名乗ろう。私はキアラ・デルヴェッキオ。ナポリでフリーライターとカメラマンをやっている。4年前から色々あつて男装しているが、生物学的には完全無欠の女だ。

しかし、今はその男装も役立っている。

というのも、私は裏社会に片足を突っ込んで取材を行っているのだ。

どうしてそういう道に辿り着いたかは分からない。ただ、私が記事を書いている雑誌『Curiosare』（こつちの言葉で「好奇心」という意味だ）の編集長に軽く言われて興味本位で取材をしていたら、いつの間にかこうなったのだ。

それでだが、今日はナポリでも有数のマフィア（本物のマフィアの原産地はシチリア島だが、まあ気にするな）、マルディーニ・フアミリーに取材を依頼し、私が個人情報 washing ざらい白状する事と引き換えに（不本意だが）許可が下りたので、ボスがまかり間違つて悪い気を起こす前に取材しに行った。

幼稚園児に書かせたみたいな地図を頼りに（もちろんその半分以上を私の脳内地図で補完しているのだが）、待ち合わせ場所へ行く。事務所の場所は知っているが、相手の意向に従うのがジャーナリストの基本中の基本だ。

まあ、最近はそれすら守れていないにわか野郎の方が多いのが現実だが。

しかしまあ、今回は向こうに私が女だと知られているわけだ。もしかしたら、それを知っている向こうの連中が襲ってくるかも知れない。そもそもあのエロジジイの事だ。何か良からぬ事を考えてい

てもおかしくはない。何せ、許可が下りたのは私が情報吐きだした後だったからな。

一瞬、護身用具を持っていこうかとも思ったが、万が一見つかったら二度と娑婆しゃばに帰れないだろうから、丸腰で行くことにした。

が、向こうの人間は、定刻を1時間過ぎても下っ端すら現われなかった。

私はついに痺れを切らし、直接事務所に殴りこむ事にした。

しかし、肝心の事務所に明かりすら点いていない。

「あー。ごめんくださーい」

扉は不用心にもすんなり開いた。

というより、鍵が壊れていたから、施錠もくそも無かったというのが正しい。

「ヘタレな鍵だな……」

呟き、中を確認する。

暗い。

残念ながら今日は懐中電灯は持ち合わせていない。

しかし、月光がちょうど差してきたので、まあ良しとしよう。

随分と惨たらしい光景であった。

男達の生首が、眉間に釘を打たれて壁に打ちつけられていた。

嫌過ぎるオブジェだ。

数的に……全員がやられたらしい。

しかも、あまり荒れていない所を見るに、刺客は極少数だったようだ。

かと言って、殺し屋を仕向けられていたにしても、こんな事をやらかす頭おかしい奴があの中にいるだろうか。

「という事は、個人か？」

信じがたいが、そうとしか考えられなさそうだ。

——と、その時だった。

私の目の前のテーブルに、何者かが降り立った。

そして、私の首筋に日本刀を突き付けてくる。

——だが、私にとってはそれさえもどうでも良かった。
その何者かの正体が、赤い鎧を身に纏った美しい武者だったのだ。
兜に隠れた顔が月の光に照らされる。

さらさらの黒髪に大きな茶色の瞳の、思わず溜め息が零れるほどの美しい女だった。

無意識に、首から提げたカメラに手が伸びる。

この美しい女武者をシャッターに収めてやりたい衝動に駆られる。
彼女は訝しげに目を細めたが、刀は微動だにしなかった。

命を取って彼女を撮り逃すか、命を危険に晒しても彼女を撮るか、
決心は着かなかった。

と、迷っている内に彼女が刀を首筋から離し、鞘に収めた。

シャッターチャンス。

だが、彼女はすぐに身を翻したため、横顔しか撮れなかった。

武者は、私がシャッターを切った事を咎めず、静かに走り去った。

翌朝、テレビを点けると、昨夜の事件が大きく報道されていた。
ナポリどころかイタリアで最も恐れられていたマフィアがたった一
夜にして全滅したのだから、当然だろう。

私も、目撃者として事情聴取されかねない。

そうしたら、あのカメラ（デジタル一眼レフ）のデータを警察に
差し出す羽目になるだろう。

しかし、そうしたらあの女武者が逮捕されるかもしれない。

別に彼女の肩を持つわけではないが、あの浮世離れた美しい武
者の無様な姿など見たくない。

テレビには、事務所にあつたらしい防犯カメラ（犯罪組織なのに）
の映像が映し出された。

どうもこれで私が冤罪を食らう可能性はほぼゼロになったわけだ
が、やはりあの女が映ってるか心配だ。

あの美貌をもう一度真正面から見たくもあり、映って欲しくなく
もあり。

しかし、幸か不幸か、彼女は上手く顔が映り込まないように立ち振る舞っており、その顔が画面に映る事は無かった。

午後から、やっぱり私は警察に呼び出された。

予期はしていたが、やはり緊張する。

ちなみに私は、取材時は男の名を名乗っているが、戸籍では未だに女扱いだ。

なので、格好はどちらの性別に合わせるか迷っている。

迷った末、もう取材時の服装にしようという事になった。

男装用のコルセットは……付けていっても貧乳と言ったりも出来るしまあ付けるか。

あとはカッターシャツ、茶色いジャケット、焦げ茶色のズボン……

……よし、これで行こう。

警察署に着くと、2人の警官に案内された。

チャラチャラしてそうなノッポと生真面目そうなチビ。デコボココンビ。

やがて、会議室を圧縮したような部屋に連れて行かれ、そこで色々聞かれることになった。

ノッポの方が男装の理由を聞いてきやがったが、チビが睨みつけて制止していた。

そして、やはりカメラのデータを要求された。

しらばっくれようにも、防犯カメラ（もしかして組織内で盗難でもあったのか？）にフラッシュを焚いているのが思いっきり映ってしまったので、大人しく渡す（くそ）。

チビの方がデータをチェックする（ノッポの方は通りすがりの婦警をナンパしていた）。

と、

「……くそ……。こりゃあどうしようもねえな……」

写真を確認した後、悔しそくに顔を顰めた。

「？」

横顔では駄目ですか、と言おうとした時、

「……デルヴェッキオさん……」

チビの警官が、私に向き直った。

目の色が険しい。

「ジャーナリストの貴女にこう言っても効果は無いでしょう。しかし……」

とりあえず言葉を止めることにした。

「——この女の事はあまり詮索しないで下さい」

今から詮索しようと思っていたのだが。

そう言つと、警官はさらに険しい顔をした。

「絶対にいけません。仮に調査したとすると、貴女はマフィアの蔓^は延^びる世界よりさらなる深みに入ると思つて下さい。もちろん警察の守備範囲を超えています。そんな場所に自分から入り込んで、命の保障があるわけがありません。何せ、我らどころか神さえも裁けない連中の世界ですからね……」

私は反論が浮かばず、黙るしかなかった。

だが、私の好奇心は収まらなかった。

彼女の事をもっと知りたかった。

チビの話も気になった。

サツどころか神さえも裁けないとはどういうことだろうか。

「幽霊とかか？」

そんなわけではないか。

「もしかして非生物？」

いや、それもそれで荒唐無稽な推測だろう。

結局、仮説すらつかなかった。

ナポリの街に夜が来た。

かつて「ナポリを見てから死ね」と言われたほどの美しい町並みは戦災によって破壊され、その一部は未だに人体に影響がある強さ

の放射線が観測される『Hazard Area』に指定されている。

そこがどうなっているかわかり気になるのだが、厚いコンクリートの壁に覆われ、色あせた『Danger』の文字と放射性標識のマークが書かれた黄色い看板がそこかしこに取り付けられていた。

その壁を何ともなしに見つめていると、

「——ん？何だ？」

刃のこすれ合うような音が私の耳に届いた。

とりあえず、その方向に向かってみる。

すると、私の目の前に有名なナポリの広場が現われた。

しかしかつての美しさは影も形も無く、煉瓦は崩落し、所々戦争の犠牲者の血を吸って赤茶色に変色していた。

そこに、人影が2つ。

1つは、バスタードソードを手にした、騎士のような鎧姿の10代半ばと思しき赤毛の美少女。

そしてもう1つは——

「——なっ……！！！」

あの、美しき女武者だった。

少女の斬撃を、時には交わし、時には日本刀で受けている。

その猛スピードの戦いは、まるで2人で踊っているかのように鮮やかだった。

赤毛の少女は自棄^{やけ}になって剣を薙ぐが、黒髪の少女は涼しい顔で跳躍した——9mほど。

私も、赤毛の少女さえも呆然とする。

武者が、騎士の背後に音も無く着地した。

そして踵を返すと、騎士に向かって疾走する。

2人は、それぞれ剣と刀を手につかり合った。

その瞬間、

「ケホッ——！」

「ぐっ——！！！」

騎士は腹から、武士は脇腹から血を流して、同時に倒れた。

「だ、大丈夫ですか？」

我ながら無様に慌てて、武士の方に駆け寄る。

騎士の方は、どうも傷の深さから見て助かりそうにない。

黒髪の少女が呻きつつも半身を起こした。

その背中を支えて、もう水の枯れた噴水の縁にもたれさせてやる。

「かたじけない……」

「えと、この鎧、どうやって外すんですか？」

「いや、出来る所は己でやる故……痛て」

「不用意に動いてはいけませんよ。で、この兜はどうする……あ、ここの紐をほどけばいいですか」

「そうじゃ……鎧も、本当は頭の方から取るのだが、今回はもうばらしてしまうかの」

それからまだ色々とグダグダ鎧を外していると、鎧によって隠されていた彼女の体が露わになった。

やっぱり美しい。

意外にスタイルがいいし、胸も大きい。少なくともEカップくらいはあるだろう。

……我ながらなんて所見てんだ……。

「早く消毒しないと……」

するとその女性は、

「いや、大丈夫である。——この通りだ」

自ら和服の襟をはだけて、傷を見せてくれた。

傷の奥から、金属が覗いていた。

「L u d w i g a n d C a r l o」

「よおルツツ！今日はもうあがりか？」

「おお。お前もか？」

後輩であり幼馴染のカルロ・アンドレッティに肩を叩かれ、ルー

トヴィヒ・カナヴァーロはニコリと笑って振り返った。

長身（180cm）のカルロは、クセ毛の茶髪に淡褐色の瞳の、少々軽そうな青年だ。一方、小柄（180・25cm）のルートヴィヒは、黒髪に両目に泣きぼくろがある大きな茶眼の、どこか高貴さの漂う美青年。首からは十字架を提げている。

この2人、キアラの証人喚問をやっていたあのデコボココンビなのだが、こんな顔立ちの良い男2人に対してさえ何とも思わないキアラはもうどうかしている。

「でもあの子、可愛かったよなあ！あんな子が男装してるなんて、宝の持ち腐れだよなあ！」

「……やっぱりあれは色目だったのか……」

「バレてた？」

仕事ではカルロが敬語を使っているが、プライベートではタメ口の仲だ。

かなりの女好きである彼は、幼馴染の白い目も気にせず、今日会った美人の容貌を思い出していた。

ショートカットの黒髪に鋭い茶眼の、口元にホクロのついた、長身で男っぽく引き締まった体格のクールビューティ。どこか荒れている雰囲気はあったが、気にならなかった。

「あの子、外は冷たそうだったけど、きっと中には熱い情熱がグツグツ煮立ってそうだったなあ！」

「お前、熱い情熱って字重なってるといっつか、そもそも色々と文法おかしいといっつか、さっきは突っ込まなかったが守秘義務ナチュラルに破ってるといっつか」

「……うん。僕の戯言にマシガンみたいなツツコミをありがとう……」

ちよつと引き気味だったりする、

「でもまあ、何であの事件捜査中止になったんだ？あの写真で十分犯人特定出来るじゃないか」

「確かにな」

「それじゃあ——」

「——だが、デルヴェツキオにも言った通り、あの女——いや、『あれ』は神さえも裁けない連中だ。俺達には手も出せない」

「そこだ、俺が聞きたいのは。何でんな事言えるんだ？マフィアだつて死ねば神の裁きを受けるはずだろ？」

「いや。善だの悪だの以前の問題だ。『あれら』は、神の御加護からも御裁きからも外されている」

「……どういう事だ？」

首を傾げるカルロに、ルートヴィヒは一瞬躊躇い、しかし観念したようにゆっくり口を開いた。

「——人造人間なんて、神でも対処出来ないだろ？」

「Caroline」

カロリーネは、研究室らしい部屋で目を覚ました。

「……目を、覚ました……！？」

記憶が正しければ、自分は死んだはずだが。

頭を捻っていると、

「——あら、目を覚ましたのですね」

「ようこそ、カヴァリエーリ研究所へ」

自動ドアが開き、2人の20代半ばと思われる女性が入って来た。

1人は、ゆるくカールしたセミロングの栗毛に茶眼の、いかにも優しげな白衣の女性。

そしてもう1人は、死の直前に現われたあの女性であつた。

「カロリーネさん、でしたっけ。私は、イレネ・モルゲンシュテルンです。ここに住んでいる、『鋼鉄花』——元の体の主『親株』と過去の人物『種』の記憶をインストールされたアンドロイドの一派、『Psyche』のリーダーです。こちらの白衣の子は、この所長さんが開発した同じく『鋼鉄花』の『Hestia』の一人、ロビン・ウォルトンです。……どうですか？機械の体になった感想

は」

「五感も器官も感情も人間そのままですから、そういう感覚は無いかもしれませんね」

「……………機械……………」

いくら自分の体を見回してみても、元のままにしか見えない。

「それでは、左手首を見て下さい。継ぎ目みたいなのがありますよね？」

「ええ。これは外れるのですか？」

「その通りです。ちよつとやってみて下さい」

「ええ」

ちよつと開けてみた。

すると、手首に内蔵されている液晶が姿を現わした。円グラフや数値などが表示されている。

「この青い円グラフは稼働可能時間、緑色のグラフは体力の残値、この数値は充電の残り時間です。あと、胸も見てみて下さい」

「あ、もしかして、この事ですか？」

彼女が指さした、ちようど右の上乳辺りに、蝶のマークがあった。

「これは？」

「これは『Psyche』である事を現わすマークで、私にもついています」

そう言つて、軍服美人——イレネが上着の裾をたくし上げると、脇腹に同じ蝶のマークがあった。

「ロビンには炎のマークがついているのですが、彼女達『Hestia』は人に有益である事を目指して作られたアンドロイドで、私達『Psyche』の目的は、愛される事、です」

少し、引かかった。

彼女はあの時、戦う運命になると言つてなかっただろうか。

「あの、では、戦うと言つていたのは……………」

すると、それまで微笑んでいたイレネが、急に憂いを帯びた。
「えつと、あの、変な事聞いてすみません」

「いえ。いいですよ。いずれ言わないといけないです……。――私達は、同じ『鋼鉄花』の一派、『Athena』と戦っているんです……」

「どうしてですか？」

「私達が元いたローゼンタール研究所に彼らが襲ってきまして……。それで、私達の仲間の多くを破壊し、おまけに、私達『Psyche』の開発者である、機械になる前の人間だった時代の両親を……！」

そこで彼女は、耐えられなくなったのか泣き崩れてしまった。

カロリーネはそれに呼応するように涙を流し、彼女の肩を抱いた。

「どこのどいつなんですか！その『Athena』というのは！」

ロビンに涙を拭いてもらったイレーネは、それでも涙声だった。

「アメリカの大手軍需会社『Ultrasonic Co.』が開発したアンドロイドで、戦う事が存在理由の連中です……。そのせいか、警察に訴えても会社の方に口止めされたのか、取り合ってくれなくて……。それなら、自分達で皆の弔い合戦をと……」

「――なっ！！『Ultrasonic』ですって！？」

カロリーネは、腹から怒りが込み上げてくるのを感じた。

イレーネの肩に掛けた手にも力が入る。

「痛い」

「あ、すみません」

彼女の呟きでやっと思分を取り戻した。

「よし！分かりました！私も『Ultrasonic』に恨みのある人間です！！助太刀しましょう！！」

「ありがとう！！本当に！？」

「良かった！！」

2人の憂い顔がパツと華やいだ。

「なら、用意しないとね！武器とかはもう用意してたんです！ちよつと一緒に来て下さい！」

「あ、はあ……」

カロリーネは、なされるがままに彼女達について行った。

着いた部屋には、引きしまった肉体を持つ大柄な、歌舞伎役者みたいな凛とした上品な顔立ちの黒人青年がいた。

「彼はガウエイン・ウォリック。貴女のパートナーになる予定の人です。貴方と彼の『種』は生前主従関係でしたし、性格も合いそうなので、多分上手くいくと思いますよ」

確かに同じにおいがする。

しかも、自分の横にも皆の横にも見える幽体が、自分のも相手のもどこか落ち着きなさげだった。

私のは……はつきり見える。滑らかな黒髪に澄んだ大きい茶色の瞳の、白い肌をした美しい若武者だ。鎧が煌びやかだから、きっと身分の高い武士だろう。

しかし、記憶を移しただけでなぜこうなるのか。いくら考えても分からなかった。多分、開発者にも分からないだろう。

「少し入れ替わってみてはいかがですか？きっと『種』も久々に主従再会したいでしょう。指パッチンすれば入れ替われますよ」

言われた通り指パッチンしてみる。

すると、幽体離脱したような感覚に襲われた。

代わりに、横にいた若武者が自分の体に入った。

「うむ……やはり動きにくいな……」

「そうですか？すぐに慣れますよ」

同じく入れ替わったイレエネが言う。

「また英語話せない人ですか？寂しいですよ……」

ロビンまで入れ替わった。

「と……殿……」

ガウエインとかいうらしい青年も入れ替わった。

もはや『種』天国。

で、主従の事だが、微笑ましいどころかちょっと引いてしまうほど、涙をぼろぼろ流して再会を喜び合っていた。

「殿！！お久し振りでございます！！」

「弁慶か！！まさかこのような形で再会するとは思ってもおらんかった！！嬉しく思うぞ！！」

もはや、主従というより無二の親友同士の再会に近かった。

「武器の件」

たまらず、イレエネ裏が突っ込みを入れる。

「おう分かつておるわ」

ガウエイン裏が名残惜しそうにカロリーネ裏から離れ、彼に日本刀を手渡した。

「太刀か……」

刀を抜き、鞘から解き放つ。

そこで、彼は息を呑んだ。

「これは……！『薄緑』ではないか！」

「そうですとも。『膝丸』であり『蜘蛛切』であり『吼丸』である『薄緑』です。所在不明でしたが、ようやく見つけました」

「よくやったぞ！」

そのやり取りを、カロリーネはポカンとして見ていた。日本の事すらよく知らないのだから、仕方ない。

見かねたイレエネが解説してくれた。

「あれは、源氏という日本でも有数だった武家の家宝で、『髭切』と並ぶ名刀です。彼がちょうど源氏の出身であり元の持ち主でもあったので、これが一番使いやすいかと」

「戦国武将ですか？」

「なんでそうなるんですか……。いや、あの源氏というか源一族というのは、源平合戦で平一族を相手に日本中を巻き込む戦いを繰り広げた一族です。彼はその内源一族側にいて、その戦術を駆使して、源氏を勝利に導いた張本人です」

「勝った方なんだ……」

なら、なぜあんな陰^{かげ}った顔をしているのだろうか。

その翌日、彼女はマルディーニ・ファミリーの事務室にいた。

「九郎さん、ごめんなさいね。私の復讐を貴方に押し付けちゃって」
『いいや、良い肩慣らしになった。それに、私もそなたの境遇を聞いて腹を立てておったのだ。礼はいらぬ』

彼女は、男達の生首の眉間に釘を打ち、壁に取り付けていた。

『これで本当にそなたの怨みは晴れるのか？』

「晴らさないといけないでしょう。もう元には戻らないんですし」

『そうだな……』

カロリーネは最後の首の後始末を終え、疲れたとでも言うように両手をだらりと下ろした。

「気は済みました。もう帰りましょう。電池も後僅かです」

『分かった』

——と、

「……む？」

裏人格——九郎というらしい——が、鋭い目つきでドアの向こうを睨む。

「どうしました？」

『何者かがこちらに近づいておる』

「まず隠れましょう」

『うむ』

ボスの部屋の壁に張り付き、肩越しにドアに注意を集中させる。指を鳴らして、人格を入れ替える、

やがて予想通りにドアが開き、若い女が顔を出した。

「私が相手をする」

九郎は刀の柄に手を掛け、彼女に飛びかかる手筈を整えている。

が、

『ちよつと待つて下さい！』

女の顔を一目見た途端、カロリーネが彼の肩に手を掛けて制止した。

『あの人は殺さないで下さい！！お願いします！』

九郎が、彼女の大きな目を見つめる。

「――承った」

そして、彼は刀を解き放ち、大きく跳躍した。
まるで、しがらみから抜け出そうとしているかのように。

第一咲 復活花（後書き）

中途半端に1章終わりです。

なんかキアラが妙に冷たいというか皮肉屋な感じですが、後半には大分印象が変わると思います。

あーあと、なんかやたらと「神」って出てきますが、私個人は無神論者なんで悪しからず。というより、不特定多数の人が観察できるモノというのは科学の範疇外なんで、実在を証明できないんですね。

ちなみに、「膝切」の話ですが、資料によって表記がばらばらで、迷ったんですが、wikipediaに従いました。でも表記が一致しないのは困りますね、やっぱり。

さて、2章からは本格的な戦いが書ければいいなと思っております。この『鋼鉄花』から下書きを書くようにしているので、見切り発車で書いていた『軍隊島』よりはまとまった文章が書けるのではと、勝手に期待してたりします。

それでは、次章を長い目でお待ち下さいませ。

第二咲 好敵花（前書き）

第2章です。

これから本格始動していく予定。アッシュ君達も久し振りに顔出します。

第二咲 好敵花

「Chiara」

あの後、私は女武者——カロリーネちゃんを件の研究所まで運んだ。

彼女に肩を貸して歩いていると、話通り白い綺麗な建物数棟が見えてきた。

彼女曰く、正門の東側に『Psyche』用住居棟に続く門があるそうだが……あつた。

門の脇には守衛室みたいなものがある。

「どうしました？」

その中から声を掛けてきたのは、カロリーネちゃんと同じ年くらいの、栗毛の短髪に凛々しい碧眼の、どう見たって男物な白いタンクトップと迷彩柄のカーゴパンツ姿の、男前な……性別不明の青年だった。

名札には「Seigio」と書いてある。男だろうか。

「いえ、俺は女ですが、とにかく女扱いが嫌いなものですから、名前も変えたんです。本名は忘れたという事にして下さい。……ところであんた誰ですか？リーネといえるんだから敵ではないでしょうが」

「私はこの子を送りに来たんです。ちょうど戦闘を見かけまして」

「敵の方はどうしました？放置ですか？」

「え？ああ、そういえば背負ってましたね」

あまりに軽かったから今まで気にしてなかった、気を失っている赤毛の少女を背中から下ろした。

セルジオというらしい男装の少女は、カロリーネちゃんとその女の子を、住居棟らしい建物から出てきた女性達に預けた。みんな揃いも揃って美人だ。

「あの敵の女の子、どうするんですか？」

「とりあえず向こうの情報を吐かせます。それから考えてませんが、殺しはしないでしよう。出来ませんし」

ほっとした。私が運んできたせいで彼女が殺されたりしたら、気まずくて仕方がない。

「——あら、お客さん？」

セルジオさんと喋っていると、いきなり下の方から声がした。

見下ろすと、さらさらの黒い短髪に大きな濁りの無いヘーゼルの瞳の、小柄な美人さんがいた。

「姉御、こちらはリーネをここまで送って来てくれた……えっと……」

「フィリベルト・デルヴェッキオです」

ここでは男性名を名乗っておこう。

「私はイレネ・モルゲンシュテルンです。……あら、貴方もセルジオみたいに男装をしていらっしやるのかしら」

いきなり度肝を抜かれた。一発で見破られたのは初めてだ。

さすがは謎のアンドロイド集団のリーダーだ。

「いえ、褒められたものではありませんよ。人間として生きてきた年月を合わせればもう40代半ばですから、年寄りの勘ですよ。まあその事は置いておきまして、私達も中へ入りましょうか。春も近いですがまだ寒いですし」

「いいんですか？」

「ええ。仲間を送ってきていただいておいて、おもてなしもせずにはい、帰って下さいというのは寂しいですもの。少々散らかっておりますが、どうぞお入り下さい」

「それでは、お言葉に甘えて……」

なんだ。チビ警官と話が違っじゃないか。マフィアよりもやばい的な感じで言ってたもんだから内心ビビってたつていうのに、むしろマフィア屋さんよりずっと物腰柔らかじゃないか。少なくとも第一印象は最高だ。

さて、建物の中の話だが、装飾面でも衛生面でも非常に綺麗で、

ホテルをも連想させられた。いや、もつと汚いホテルなんてザラだぞ。

5階建てで、1階には緊急時用キッチン（人間用）に小さいランドリー、共同浴場（『Psyche』には綺麗好きが多いらしい）まである。

その中で私が通されたのは、2階の集会場であつた。集会場つて言つても、ちよつとしたサロンに見える。

「どうぞー」

向かい合つて座つていた私達に熱いココア（イレーネさんは甘い物が好きらしい）を持つてきたのは、綺麗な黒の長髪に灰色の瞳を持つ、爆乳・美脚・美尻の三拍子が揃つた、少し肌の色が黒い妖艶な美女だつた。水着みたいな服なのは何のサービスだろうか。腕には薔薇のマークがあつた。『鋼鉄花』の、また別の一派だろう。

「彼女はリーネの友人であるマリッサさんです。清く美しくある事を目指した『Aphrodite』の1人なんです、神話と違つて両者の仲は良好なんです」

「……服的に清らかとは言えんがな……」

「つつこまないで下さい……」

その後も、彼女たちとグダグダ世間話をした。

それで、ココアも無くなつてマリッサさんにおかわりを頼もうとした時だつた。

コンコン

「あら、ロビンかしら」

イレーネさんがドアを開けると、そこには25歳くらいの優しそうな白衣の天使がいた。

「リーネさんの修理が終わりました。既に目を覚ましております」

「ありがとうロビン。……キアラさん（本名はバツチリ教えました）、一緒に整備室へ、どうですか？」

「あ、え？はい……」

促されるまま、私は彼女達の後をついて行つた。

階段を降り、住居棟を抜ける。

敵との戦いの被害が研究所に及ばないように棟の周りに設置した高い壁の出入り口を出ると、ゲストハウス（意外に見学者が多いらしい）、共用棟（食堂なんかがあるようだ）、研究棟（生物・化学・工学・その他モロモロと、色々研究しているらしい）、研究者用宿泊棟（徹夜したい人用）、『Hestia』用住居棟（この所長によって開発されたのだ）、実験用植物園（見学者に大人気らしい）、そして、研究所内の癖に病院があった。

「あそこはカヴァリエーリ総合病院です。もちろん実験なんてやってませんよ。所長の息子さんが院長ですし、そもそも所長自身が、まあユダヤ系というのも影響しているのかもしれないですが、とにかく人体実験が大っ嫌いなんです。そんなわけで、悪い評判は無く、むしろリピーター多数です」

なるほど、メモメモ。

「リーネさんはあの病院地下の整備室にいます。行きましょう」
病院内は清潔感溢れる白で統一されており、それでいて変な威圧感とは無縁であった。

地下も手抜き無しだ。さっぱりしている。

「リーネさん。入りますよー」

ロビンと呼ばれていた白衣の女性が、「整備室A」と書かれたドアをノックする。

「はい」

返事があつたので、遠慮なく乗り込んだ。

カロリーネちゃんは、手術台みたいなものに腰掛けて、頬にUSBメモリーのような形状の棒を刺して、左腕の一部が蓋みたく開いた所を見つめていた。

「えっと、カロリーネちゃん。何刺してんだ？」

「これはスピリッツって言って、エネルギー補給するための物でね、ほら、こうやって頬の蓋を開けたら差し込み口があるでしょ？ここに差すと、人間で換算すると食事1回分くらいの電気エネルギーを

補給できるの。これ、差してる時は味も感じるの」

言いながら彼女は、すぴりつとやらをちよつと外して差し込み口を見せてくれた。

「まあこれは言ってみれば補助用で、大方はこのうなじの所にあるコンセントから直接電気を取り込んでるわ」

「そんなに充電が必要なのか？」

「もちろん。機能が多いもんだからその分電力の消費が激しくてね。ほら、高性能の携帯電話なんてやたらと電気食うでしょ？」

「そつか。……で、その左腕のやつは？」

「あ、これ？これは話にもあつたメーターよ。ちなみに体の異常は普通に痛みで感知するの。それが一番安全なのよ。無痛症の子とかって、目とかも平気で引つ掻いたりするもんだからゴーグルつけたりしないといけないし体傷だらけだしって感じで結構大変らしいから」

そういえば、そんな話聞いた事ある。

「——よし、充電完了」

カロリーネちゃんがスピリッツを外し、手術台から降りる。

「もう部屋に戻れそう？」

「ええ、大丈夫です。……ロビンさん今日もありがとう！」

「お大事に。もうこんなひどい怪我してきちゃ駄目ですよ」

整備室を出た私達は、再び集会場に戻った。

この時既に、『Psyché』への興味がムクムクと頭をもたげていた。

それを2人に打ち明け、取材をしたいと言うと、予想通り反対された。

「え、危険だけど、いいの？流れ弾が来ないとも限らないわよ？」

「私達は別によろしいですが、命の保障までは出来ませんので……」
粘ってみよう。

「命の保障なんていいんです。取材によって何か残せばそれでいい」

「でも、巻き込まれる事必至よ?」

「そうです。きっと『Athena』は、貴女を私達の同胞と見なすでしょう。そうなったら、貴女が彼等に狙われる可能性だって十分にあります。やめておいて損は無いでしょう」

……うぐ、なかなか手強い。

しかし、諦める気は毛頭無い。

それを悟ったのか、イレネさんからこんな事を持ち掛けてきた。「私達だけでは貴女をお守りする事は不可能に近いです。その代わり、貴女が自らの責任で身をお守りになるとおっしゃるのであれば、許可しましょう。ただし、何が起ころうとも恨み合いは無しです」

なるほど、自分達は責任を取りませんよ、という事が。

「分かりました。大丈夫です」

「それなら許可しましょう。いつでもここにいらして下さい」

「は、はい!」

思いがけず声の上擦ってしまった。

こうして、見切り発車で私の『鋼鉄花』取材は幕を開けたのであった。

私は家に帰って睡眠を取り、昼頃に再び研究所を訪れた。

集会場には、リーネちゃんとイレネさん、そして灰色の髪と目の少し小柄な老人がいた。60歳くらいだろうか。すごく優しくそう。

「あ、キアラ」

「キアラさん。こんにちは」

2人共ニコリと微笑みかけてくれたので、私も微笑み返す。

するとおじいさんが、

「ああ、君がキアラちゃんか。話は聞いたよ。この子達を取材したいんだってね」

と、フレンドリーに歩み寄って来た。

「私はベネデット・カヴァリエーリ。ここの研究所の所長をやっているよ。昨日はカロリーネちゃんがお世話になったみたいだね。こ

の子達を取材したいのなら私も少しは関わるかもね。よろしく！」
そう言えば私、所長を顔合わせてなかったな、と思いつつ、博士
(……で合ってるよな?) が差し出した手を握り返した。

……何だか、深く取材すればするほど印象が良くなって来る。こ
れは、あの頭硬そうなチビにも教えてやった方が良いかもれない。
「実は今日、『Athena』からカローリーネちゃんに向けて直接
果たし状が来てね。と言っても、決闘の前には絶対来るんだけどね。
でも個人宛は初めてだよ。それも向こうのルーキーからだ」

「ルーキー、ですか?」

「うん。九度山^{くどやま}信乃^{しの}っていう若い女の子らしいんだけど、結構強い
らしいんだ。……ねえ、イレーネちゃん」

「そうですね。若いですけど優秀な槍使いですし、知略も長ける。
下手な戦はしない人ですよ。もともと、仲間には新人という事で軽
蔑されているようですが、将来がある。だからこそ、我々にとつて
は脅威です」

……結構やばそうか?

「と言っても、負ける気はさらさら無いですがね。リーネも新入り
ではあるものの刀の扱いは達人級で戦略家、十分対抗できるでしょ
う。連日の戦闘というネックがありますが、あちらも同じ条件らし
いですし」

「大丈夫でしょう。ここは一応ガウエインと行きましょう。向こう
が雑魚を連れて来ている可能性もゼロではないですし」

「それなら頼むわよ。深夜2時にあの広場に、ね。私もちよつと顔
出すから」

「分かりました。お任せ下さい」

彼女はキリリとした凜々しい笑みをたたえ、力強い足取りで去っ
て行った。

昼に睡眠を取った私は、リーネちゃんとガウエインさんと共にあ
の寂れた広場の血染めの煉瓦を踏んだ。夜型人間キアラ。

目の前に、アジア系と思われるポニーテールの少女がいた。白い小袖に黒い袴に赤い胴丸と鉢巻が映える、スタイル文句なしの美人だ。リーネちゃんと同じ年くらいだろうか。

「話は聞いていた。あんたがカロリーネとやらか。私は九度山信乃だ」

リーネちゃんが指を鳴らす。

「そなたが件の手練れか。さすれば話は早い。お手合わせ願う。…弁慶、そちはあの者が手の者を出すまで下がっていろ。その代わり、手の者が現われた時には背中を預ける」

「承り申した」

「いや大丈夫だ。私は手下なんて使わんよ。1対1で正々堂々とやるう」

信乃ちゃんが1本の十文字槍を構えた。

「ん？あんたは入れ替わらないのか？」

「裏は昨日暴れ回って疲れているだろうからな。私も武道の心得はある」

「それなら良い。かの巴御前とて女子じゃ。手練れに男も女もあらぬ。いざ勝負！」

言うや否や、九郎さんは疾走して信乃ちゃんに向けて居合い斬りした。

しかし信乃ちゃんは、槍でその一撃を受け止めた。

「今度は私の番だ！」

彼女は槍を構え直し、鋭い突きを繰り出した。

「……速い」

九郎さんが冷や汗を流す。

それでも、何とか刀で槍を跳ね上げさせた。

そのまま、腕を返して斬り込む。

だが、信乃ちゃんは突きで弾き飛ばし、槍の先端を九郎さんの脇腹に食らわせ——ようとしたが、彼は槍を足掛かりにバク宙してかわした。

この間、3分も無かった。

2人は一旦下がり、体勢を整える。

「そなた、なかなかやるな」

「あんたこそ」

呼吸は乱れていた。

少し休むと、2人は再び武器を構え直し、そして

「せいやああああああっ！！！」

「うおおおおおおおっ！！！」

雄叫びと共に全力でぶつかった。

両者の実力はほぼ拮抗していた。

しかし、やはり昨日の疲れが残っているのか、次第に九郎さんが劣勢となっていた。

刀も、いつもより重そうに見えた。

それでも彼は、フラフラしつつも突撃する。

が、信乃ちゃんはいち早く九郎さんの懐に入り込んだ。

彼が、しまった、と焦りを露わにした。

信乃ちゃんがニヤリと笑う。

そして、彼女は喉元を焦点に槍をぶち込む——その時だった。

「！！何アレ！？」

「……！！？」

「え……！？」

今はもう博物館にしか存在しないはずの戦闘機が、ナポリの上空を駆けていた。

信乃ちゃんも九郎さんも私も、呆気にとられる。

戦闘機は、まず噴水に爆弾を——ってあれ？これって爆撃機？

噴水の近くで戦っていた2人は慌てて飛び退る。

爆発音と共に水柱が立ち上がった。すると、それに驚いてか、武器を持った男女が20人くらいバラバラと路地から出てきた。

「チッ！知らないって言ったのに！」

舌打ちする信乃ちゃん。どうやら勝手に上が寄越した彼女の援軍らしい。

爆撃機のパイロットは、この光景を不気味に見降ろしているようだった。

「何だ貴様は！」

対空砲を持った男が、よせばいいのにパイロットを挑発して発砲した。

その時、広場を旋回していた爆撃機が動いた。

空に上がって高度を上げたかと思うと、いきなり機首を下に向けて垂直落下した。同時に、機体に取り付けられた、アホみたいに巨大な機関砲（バランス完全無視な設計のくせに機体は安定してる。ワケ分からん）をぶっ放す。

たちまち、援軍の数人が消し炭と化した。金属部分くらいしか残っていない。

そのまま機体は低空飛行する。廃墟とはいえナポリの市街地で、である。もうムチャクチャだ。

しかし、これはスクープになりそうだ。

密かにリーネちゃんvs信乃ちゃんの戦いをバツシャバシャ撮ってメモリ残量がやばいカメラを構える。

ちょうどその時、爆撃機（というよりむしろ空砲機とでも言った方がいいかもしれない）が、私の目の前で砲撃した。

シャッターチャンス、連射！

……いい写真が撮れた。やっぱり戦いは連射に限る。

次はアングルを変えようと、パイロットに目を付けられないようにと金属の塊もとい元『Athena』を横目に走り出す。

カメラを爆撃機に向けたその時、例の対空砲野郎が操縦席に向けて発砲した。

が、機体は大きくホップし、高く舞い上がった。

そして再び急降下し、野郎を的に機関砲をぶっ放した。

「すごいな……」

撮影しながらも、思わず口笛を吹く。

…… ったく、これ以上何かやらかしても撮れな…… いや、空の S
Dカードがあつた。ラッキー。

メモリを取り替え、再びカメラを構える。

するとパイロットは私が撮影している事に気付いたらしく、嫌がるどころか逆にノリノリになったのかアクロバティックな変態飛行を見せてくれた。

すげえ、余裕だ……。

—— ちよつとファンになりそうかも。

…… あ、そう言えばリーネちゃんとか信乃ちゃんとかガウエインさんとかはどうしてるんだろう、と思っていたら、リーネちゃんが機関砲の標的になったらしく、低空飛行した機体が彼女の背後から迫りつつあつた。

彼女がエンジン音に気付いて振り返る。

しかし時は遅く、機関砲は爆音とともに発砲した。

万事休すか。

と、

「ハアアッ!!」

リーネちゃんが、雄叫びと共にビルの上の3階くらいの高さまで飛び上がった。

パイロットでさえも咄然としているのが肌で分かった。

彼女は近くの煉瓦造りのビルの上の3階に窓ガラスを突き破って転がり込んだ。

もちろんこれもシャッターに収めた。

リーネちゃんはビルの中に、信乃ちゃんとガウエインさんはそれぞれ路地裏に隠れて反撃の機会をうかがっているようだ。

一方の爆撃機は、再び急降下して別の『Athena』に襲いかかった。

さて、どうなるか……。

その時だった。

「——あら、随分と騒がしいじゃないですか。どうしましたの？」
透き通る低い声と共に、路地の暗がりからイレエネさんが現われた。

「ちょ、ちよつと危ないです！1人で来ては——」

リーネちゃんが窓から身を乗り出す。

——だが、『A t h e n a』は、イレエネさんを一目見た瞬間、凍りついていた。

「う、うわあああああああ！！バケモノだアアツ！！！」

誰かがそう叫んだのを発端^{はつたん}に、『A t h e n a』達は脱兎のごとく逃走した。

爆撃機も、獲物が去った事を嘆くように帰って行った。

信乃ちゃんも、気が付けば姿を消していた。

「あ、キアラ。随分撮ってたねえ！」

リーネちゃんがビルから飛び降り、ガウエインさんと共に走り寄って来た。

「姉御！奴ら本当に失礼ですね！何ですか化け物って！こうなったら黙っていられません！今度の決闘でボッコボコにしてやりましょう！！！」

ガウエインさんは苛立ちを隠そうともせず、ただ自分達のリーダーが化け物呼ばわりされた事に立腹していた。

——しかし、イレエネさんは力なく笑って項垂^{うなだ}れていた。
悲しげに。

翌日、私は本業の取材でイタリア3大犯罪集団の1つ、カモツラの中でも片手の指の中に入るヘタレ組織、ロッセリーニ・ファミリアの事務所を訪れた。

事務所に入るや否や、ワインの匂いがプンプンしてきた。朝っぱらから酒をかつ食らってるらしい。皆当然のようにダーツやトランプに勤しんでいる。

組長自ら受けてくれたインタビューの最中も、彼の奥さんや組員

達がしきりに酒を勧めてきた（しかし、挨拶代わりのグラス2杯でやめておいた）。

……この人ら、カジノやらバーやらで稼いでいるらしいが、収入は足りているのだろうか。と思ったら、組長が今度合法的な商売に手を出したいと言ってきた。まったく、どこぞの賄賂ひったくつて警察諸君一部なんかよりよっぽど健全な市民やつてるじゃないか。取材を終え、帰路に就いた（帰り際、プライベートで1杯やらないかと言われた。ただだけ酒飲みたいんだこいつら）。

その道すがら、チンピラに遭遇した。

連中と絡んでもロクな事は無い。制御が利かないという面で言えば、マフィアよりもずっとタチが悪い。

しかし、他の道にそれる前に連中に囲まれてしまった。

「テメエ、オレらのシマ勝手に入ってんじゃねえよマッポが」

……はあ？

整理すると、つまりは私が警官に見えるという事か？目の病気なのか？大体、ここロツセリー二の陣地だし。

そう言うと、何かキレてきた。ビタミン不足。

「うつせークソ野郎！！とりあえず金寄越せつつたろ！！」

初めて聞いたぞんな事。こいつらのIQ調べたら面白い値が出てきそつだ。

「悪いが、私は今日金を持ち合わせていなくてな、そもそもこちら貧乏で持ち歩ける金は無い」

そしたら、優しく言ってやったのに余計キレやがった。こいつらは「衣食足りて礼節を知る」の逆の例を地でいっているようだ。

「あア！？ナメてやがんのかテメエ！！ぶん殴ってやる！！」

で、実際にぶん殴られた。

本当にムカつくなら手元の銃を使えばいいのに。さてはこいつ、まだ人を殺すようには肝据わってねえな？

「くそっ！スカした顔しやがって！テメエらこいつ押さえてろ！」

その声と共に、私は2人の男に体を押さえられた。

さすがに覚悟を決めた。

と、その時だった。

「――君達、何やってるのかな？」

少し高い若者の声が路地の入口から聞こえてきた。

皆一斉にその方向に目を向ける。

そこには、金髪碧眼で色が白い、中肉中背の、顔立ちに少し幼さを残した美青年がいた。肩に美しい白鳩が乗っており、大きな鞆を持っていた。

「駄目だよ？道端の女の人にちよっかい出しちゃ」

青年は、チンピラ共が構えている拳銃も意に介さず、子供じみた笑みを浮かべて鳩を撫でている。

「テメエ何ニタニタしてんだ！！ふざけやがって！！」

こいつら「ゝやがる」使い過ぎだな、なんて思いながら一番若い男に体を押さえられている。いい加減放せよ。

「ふざけてはいないよ？ただ、『軍隊島』帰りとしては物足りないっただけだよ。だって弱そうだもん」

……………『軍隊島』……………？

初めて聞く単語だ。

もしかして、都市伝説として囁かれている「民間に知られないように戦争をする為の人工島」の事だろうか。

あれは真実だったのか？

「『軍隊島』だかなんだか知らねえけどナメんじゃねーよ！！ボコボコにしてやる！！」

チンピラ
馬鹿はそんな事は考えもせず、ただ青年に向かって殴りかかったが、

「グゲツ！！」

野郎は青年の回し蹴りを喉元に食らい、バタリと倒れた。あっけない。

「テメエ！！よくもニツクを！！」

もう1人がいきり立って殴りかかりつつも、青年に逆に殴られて

また倒れた。

3人目は、私を解放して逃げた。

後に残ったのは、私と青年だけだった。

「あの、助けて頂いてありがとうございます……」

「いや、お礼はいいですよ。僕もいい肩慣らしになりましたし。：

…ああ、1つだけ聞きたい事があるんですが、カヴァリエーリ研究所ってどこですか？」

もちろん知っている。が、案内して大丈夫だろうか。

『Athena』とは思えないし、いいか。

「ああ、私知ってます。案内しましょうか？」

「その鞆って何が入ってるんですか？」

「これは精油とかですね。香水用の」

「彼、フランスで調香師をやってまして、その仕事道具です」

「兄貴は鼻が利くからな。において個人の判別まで出来る」

「すごっ！」

謎の青年と研究所に行く途中で彼の連れと合流し、私達は4人になった。

1人は20代後半らしく、少しカールした赤毛に青い目、白い肌の超絶美女。背がスラリと高くてボンキュッボンな体。良い乳。どうも青年の彼女らしい。

もう1人は青年と同じく20代半ばくらいで彼と似てるし、髪や目の色も同じだ。「兄貴」って呼んでるし、妹らしい。小柄な美人だが、完全なる男口調で一人称は「俺」だったりする。兄より男らしい。

そんな3人を引き連れて、目的地に——あ、着いた。

「ここが研究所ですか？『Psyche』はどちらにいますのですか？」

「あの子達ならあそこですよ」

セルジオさんの所へ行き、自己紹介させる。

「僕らが何者かは、これを見れば分かりますよ」

そう言つて3人は、上着をまさぐつて「何か」を手にとつた。

その「何か」を一目見て、私もセルジオさんも目を向いた。

それは、金色に光る、鳩の形をしたバッジだった。

「これは、『Olive Branch』の……！」

（シッ！僕達今指名手配中なんで！詳しくは中で話させて下さい！）

青年は、口走る私の口に指を当てて、小声で制止した。

「……分かりました。特別に中にお通ししましょう」

集会場へ行く間、これほど緊張した事は無かった。

中に入り、2階に上がった所で、私の脚に何かぶつかった。

見ればその正体は、ライトブラウンの髪にグリーンの目の、10歳くらいであるう可愛らしい少女だった。

「あ、ご、ごめんなしやい……」

女の子は半泣きになっていた。

「いや、いいよ」

なんて言いつつ頭をなでなでする。

はて、この子は一体誰だ？とか思っていると、保護者らしき20代後半辺りの男性が少女に駆け寄つて、

「すみません！うちの子が……」

と言つて女の子を抱き上げた。女の子とは目の色が違って彼はブルー、長身で少し筋肉質なスポーツマンみたいな体格で、凜とした顔立ちの男前だ。

「あの、この子は……」

「この子はロツテといいまして、私の養子です。ちなみに私はベルンハルト・モルゲンシュテルン、イレエネの夫です」

「あ、私はキアラ……って、あの結婚してたんですか？」

「ええ。彼女が『Psyche』になつた後結婚しまして」

イレエネさん、リア充だったんだ。

「そうでもないですよ。事件ありきの出会いでしたから」

そうなのか。

こんな感じでグダグダ喋っていたら、階段から当の本人がリーネちゃんが降りてきた。

「セルジオ、今日もお客さんがいらしているの？」

「はい。何でも、3人共『Olive Branch』のメンバーで指名手配中とか……。そこで、大つぴらに話を聞くわけにもいかず、敵意は無さそうなので通しました」

「分かったわ。詳しい事は私も聞くわ」

そんなこんなで、総勢7人で集会場に入った（ロツテちゃんは白鳩と遊んでいた）。

——ただ、私達がバツタリ出くわした時、イレネさんも『Olive Branch』の3人も息を呑んでいたのが気になった。

その答えは、開口一番本人が言ってくれた。

「アッシュ君にマイリーちゃんにジャクリーヌさん。お久しぶりですね」

「えー!? 知り合いなんですか!？」

「ええ。私、『Olive Branch』初代メンバーの1人として、創設にも関わりましたの。この赤毛の人、ジャクリーヌ・オリヴィエさんは同志で、金髪兄妹のアッシュ君とマイリーさんとは創設者であり2人のお父さんでもあるニコラス・クロード大将の遺体を遺族に引き渡す際に会いました」

……整理すると、青年がアッシュ・クロード、金髪少女がマイリー・クロード、で、赤毛の女性がジャクリーヌ・オリヴィエが。アッシュ・クロードは聞いた事がある。

2031年に、ミッドウェー諸島とハワイ諸島を頂点として逆三角形となる場所にある聖ミカエル島から軍を起こし、ハワイ諸島を占領した『平和省』とやらが打ち立てた新国家、セントマイケル帝国（何の事は無い、聖ミカエルを英語読みしただけだ）。この国は次々とオセアニア諸国を占領し、それを足掛かりについては資源の

宝庫である東南アジアやオーストラリアにまで迫っているという。

これがよりによって、女帝ギネヴィアを傀儡かいらいとした総督による独裁国家なのでアメリカやS E U（第二ヨーロッパ連合）は制裁を下したいところなのだが、軍隊自体が無いので不可能だそうだ。

しかし、ただ1つ対抗しうる組織がある。それが2028年から『平和省』と対立している反戦地下組織『Olive Branch』であり、そのリーダーがアッシュ・クロードという男だということ。そういう噂が一部の人間の間で語られているのである。

「そうですね。その聖ミカエル島こそが『軍隊島』です。……あと、どうも私の裏人格が、その聖ミカエル島と逆三角形を作っている島の名前をあんまり聞きたくないみたいなので、今後は少し気を付けていただければ幸いですわ」

「え？……ああ、そういえばそうでしたね。黒歴史」

裏人格の正体を知る私達と、あとジャクリーヌさんはプツと軽く嘔いてしまったが、アッシュさん達兄妹はポカンとしていた。

それに気付いてか、イレエネさんが軽く咳払いした。

「余談が過ぎましたね。ところで貴方はどうしてここに来られたのですか？」

あ、アッシュさん戻って来た（精神的な意味で）。

「実は、貴方がたが対立している『Athena』の生みの親である『Ultrasonic』と『平和省』が接近しているということです。私達のメンバーは精々30人ほどなので、太刀打ち出来ません。そこで、同じ『鋼鉄花』で対立している『Psyche』に味方していただきたいなと思って来ました」

すると、イレエネさんは探偵みたいなポーズで考え込んだ。

「悪くない相談ではありますが……少し保留させて下さい。その代わり、もし隠れ家などが無いなら匿かくいましょう。同じ穴の貉むじなであることには変わりないですし」

「すみません。もしここに何かあれば加勢しますので、お願いします」

こうして何だかんだ言って形式的に同盟が成立した。

これがさらなる波乱を巻き起こす事になるだろう。

もっとも、それが吉と出るか凶と出るかはまだ分からないが。

第二咲 好敵花（後書き）

他に追加しよっかなーとか思ったんですが、蛇足っぽかったのやめときます。

第三咲 因縁花（前書き）

ちよつと小話ばかりになりそうです。

今回は、結構重苦しい話も多いんで、鬱な人は読まない方がいいと思います。

第三咲 因縁花

「Chiara」

その昼、私はセルジオさんと共に彼女がいつもいる警備室へ赴いた。

研究所の面々は所長すら知らず、『Psyche』の中でも存在を知る者は片手の指の数も満たさない、秘密のエリアだ。

「とは言っても、俺は『Sirius』という護衛目的の『鋼鉄花』から引き抜かれた存在だから、厳密にはあいつらとは違う種類なんだがな」

「護衛かあ……」

「実は表も元傭兵に近い職業でな」

「なるほどね」

警備室の奥の扉を開けて、鉄製の階段を降り、金属扉を開ける。

その向こうは、鉄製の扉が壁に左右合わせて6個ある空間だった。

「何これ」

「言やあ留置場だな。大体入るのは捕虜だな。今入ってるのは1人だが、そいつもその1人だ」

「あの赤毛の子？」

「そうだ」

私達は、1番奥の右側の独居房に入った。

鍵はカードと指紋認証。意外とゆるめ。

中は狭く、曇りガラスのような大きい壁が鎮座していた。

「これはブラインドみたいな物で、電気を流してやると向こうが見える。……こんな風にな」

彼女が壁のスイッチを押すと、一瞬で壁が透明になり、部屋の全貌が明らかになった。

何て事はない。少し狭くて出られないという事を無視すれば普通の部屋だ。特別ボロいわけでもない。むしろ綺麗な方だ。本もある

から退屈は凌げそうだし。

そんな部屋の中で、赤毛の少女は鏡の前に座り、少し伸ばした左右側面の髪を三つ編みにしていた。緑の瞳は憂いを帯びている。

「——おい、ちょっと手空けられるか？」

セルジオさんが声を掛けると、彼女はビクツとこちらを向き、私達を睨みつけた。

「何だお前ら。何の用だ？」

セルジオさんは、嫌な顔一つしなかった。表面上では。

「フン。随分と強気だな。表面上は。……名前は？」

「言つて無かつたか？エカテリーナ・ペトリヤコーヴァだ」

「聞いてなかつたぞ。歳は？」

「17」

「若いな。2歳下か。『種』は？」

「無いな」

「無い……？」

あれ？『鋼鉄花』の定義は？

「何らかのミスで『種』を入れ損なつたらしい。そもそも私の『親株』も生きているからな。我ながら変わり種だと思うぞ」

「なるほど。それじゃあ、『Athena』のリーダーは？」

「教えねえよ」

「教えねえって……。本拠地は？」

「知らん」

「知らねえわけねえだろ！じゃあ、『Athena』の生みの親である『Ultrasonic』とセントマイケル帝国が接近しているってのは本当か？」

意外と2人共短気らしいな。

エカテリーナちゃんもカチンと来たらしく、売り言葉に買い言葉とばかりに怒鳴り散らす。

「誰がテメエに教えてやるかこのクソアマー！その記者みてえな女もあたしを売りやがつて！！お前らいつか絶対に殺してやる！！」

するとセルジオさんが、怒りも露わにコントロールパネルのボタンを押して壁の一部を開けてズカズカ中に入り込み、エカテリーナちゃんの胸倉を掴んだ。

「お前……本気で言つてやがんのか……？」

「本気だとも。何なら、今からでも実行してやろうか？」

こめかみに血管を浮き立たせる相手を、あくまで嘲笑う。

その時、セルジオさんは胸倉から手を離し——彼女の頬に強烈なピンタを叩き込んだ。

「——っ!!」

頬を押さえて倒れ込む少女を彼女は冷たい目で見下ろしていた。

「テメエ少しは自分の立場を弁^{わきま}えろ。基本的には殺さねえ方針だが、その気になればいつでも始末出来んだよ。その事を忘れるな」

私達は部屋から出て、壁を閉めた。

「お前ら……！」

後ろから、恨みがましい声が聞こえてきた。

振り向くと、壁の向こうの少女は、頬に手を当てて、怒りのあまり涙を流したその目で私達を睨み付けていた。

「もう一度言う……！お前らいつか絶対に……絶対に殺してやるからな……！！」

セルジオさんが、叩くように壁のスイッチを押す。

すると、再び壁は白く濁り、もう何も見えなくなった。

妙に彼女が気になり、繰り返し2人で様子を見に行く事にした。

その日の夜も翌朝も、一言も口を利かず、私達が見えていないふりをしていた。

「怒り過ぎたか？」

「だろっねえ」

しかし翌日の昼、エカテリーナちゃんが壁を向いて何かしているのを見てしまった。

「おい、何してんだ？」

2人で入って行くと、彼女はまたビクツと飛び上がった。やつぱり根は小心者か。

「なっ……!! お前どうしたんだその手!!」

彼女の両手は血だらけだった。壁に血がべつとりと付着していた。「さてはこの壁の石崩して逃げようとしたな? 無茶しやがって。

ほら、手エ出せ」

そう言いつつも、セルジオさんは自分からエカテリーナちゃんの手を取った。

「ちよっ!! 放せ!!」

怪我人は嫌がって手を払い除けようとしたが、

「おい、応急処置してやるから大人しくしろ」

と言われて渋々抗うのをやめた。

「え、接着剤?」

「ああ。溶けて接着する仕様でな。傷は残らないんだ」

とか言いつつ、血管や皮膚がどんどん修復されていく。

その間、エカテリーナちゃんはじっとそれを見ていた。

仕上げて、手にきつく包帯を巻いた。

「これで良し。あんまり動かし過ぎたら駄目だが、日常に支障はな
いはずだ。今度はこんな無茶するなよ」

ニコリと笑って手を包む敵に、エカテリーナちゃんは素直に頷いた。

続いて、彼女のメーターをチェックする。

「あ! さてはお前充電してないな!」

確かに、電池残量がもう尽きそうだ。

「エカテリーナ。ちよつと寝てろ。倒れるぞ」

「んん……。……私の事カーチャって呼んでいいぞ? みんなそう呼んでるし……」

少し警戒を解いてくれたのか、彼女は大人しくベッドに寝転んだ。セルジオさんが、彼女のうなじを開けてプラグを引き出し、コンセントにセツトした。

「これセツトしたら睡眠欲が出てきてな」

言葉の通り、たちまちエカテリーナ——カーチャちゃんはスツと目を閉じた。

つい昨日自分を殺すと宣言した少女を、セルジオさんは優しい目で見守っていた。

私？もちろんビデオを撮っていた。こんな美味しいシーン逃してたまるか。

午後からは、リーネちゃんとガウエインさんのマンツーマン剣術教室を見学したり、アッシュさん達とダベったりしていた。

「そういえば、近くに工具店がオープンしましたが、需要無いかと思いきや凄く繁盛しているんですね。何ですかね？」

「あれは僕の知り合いの店でね、本当はあの人武器商人なんだ」

「店主の石原とは兄貴の方がつるんな。飄々としているが俺らから見りゃ面倒臭いおっちゃんだな。助手のミハイルと俺は浅からぬ仲でな。恋人ともいう」

「その2人は私達の協力者で、情報とかくれるのへえー。」

じゃあアッシュさん辺りの紹介があれば負けてくれるのか？護身用具とか売ってたら欲しいんだが。

「多分べらぼうな要求でなければ大丈夫だよ」

それなら行ってみるか。

「うん。じゃ夕方行こ」

そんなわけで、石原さんの工具店「高野工具店（偽名らしい）」にアッシュさんと一緒に行く事にした。

着いたのは、こじんまりとした新しそうな店だった。

「やあ！石原さんにミハイル君！今日も来たよー！」

「おお、アッシュか。その初顔さんは誰だ？」

「キアラさんだよ」

「久し振りだな。マイリーは来てないのか？」

「ごめんね。今ジャッキー（ジャクリンさんのあだ名）とゲームやってる。『大戦無双？』とかいうヤツ」

ボッサボサの黒髪の日本人は石原剛さん。42歳。ガリガリに痩せていて、右足は義足だ。もう1人の暗褐色の髪に琥珀色の目の美青年はミハイル・J・レブルスキー君。21歳の……名前にロシア人かな。

「そついやあの2人隠れオタクだったな。今進み具合どうだった？」
「ジャッキーがエーリツヒ・ハルトマンでLv・50、マイリーが坂井三郎でLv・70だったさ」

すると、石原さんがいきなり遠い目になった。

「坂井ねえ……実は俺、彼に憧れてパイロットになっただよな。戦後に自伝書いたのも彼の影響だし。嬢ちゃんは聞いた事あるか？『青空と焰』って」

「え！？どつかで聞いた事あると思ったらあの石原剛ですか！？知ってますよ！あれ映画化されました！いや、写真撮って下さい！」

「こんなしがない野郎でいいならな」

……よし、有名人とのツーショットゲット。

アッシュさんとミハイル君は、ゲーム話で盛り上がった。

「2人共レベル高えなあ。でも確かあそこら辺は育てやすかったよな？」

「うん。階級が高ければ育てにくいし、単純に強ければ倒しにくいらしいね。一番育てやすいのは、あの2キャラみたいに、そんなに階級高くなって強いメンツだって。敵に回ると厄介だけど。実際、

ラスボスって4人の内2人は下士官以下でしょ？あのリアルチート
「あーそつえば。あそこら辺は本当に仕様おかしいからな。マイリーも『あの鬼畜軍曹、1ターンごとに全回復して、倒れてもパートナーが生きてれば3ターン後に復活するとかワケわかんねー！』ってムキになったもんな」

「こら、ミハイル。ダベってねえで仕事しろ。嬢ちゃん、何買いに

来たんだ？」

「護身用具です。力が弱いので飛び道具みたいな物がいいです。置いてますか？」

「そうだな。最近は護身道具の方が売れてんだ。この御時世、丸腰で歩く奴の方が狂^{たしな}つてやがる」

石原さんに窘^{たしな}められ、ミハイル君が色々と武器（？）を持って来てくれた。

「最近は護身用具以外に、軍連中がガツポリ武器買ってくれるようになったな。セントマイケル帝国がブイブイ言わせだしただろ？だから危機感抱いてんだ」

「それにしては、『ニューヨーク非戦闘条約』がどうか、軍靴の足音がどうか言う話は聞かないね？」

「大衆の中でも、セントマイケル帝国を何とかしろという意見が大多数だからです」

「俺、今日の新聞見ててびっくりしましたよ。社説もオピニオンもセントマイケルを倒せばっかり。中には帝国軍皆殺しとか書いてる輩もいましたし。元はと言えば各国の軍人が操られてるだけだったのに」

「反戦組織としては穏便にやりたいんだけどね……」
んで、これが私が頼んだアレか。

催涙スプレーにスタンガン、最近じゃ護身銃とかあるんだ。

「催涙スプレーは言わずもがな。スタンガンは、映画みたいに気絶させる効果は基本的にや無いが、放電だけで十分威嚇効果はある。護身銃は、いわゆる麻酔銃だ。密造じゃ青酸カリ入りの弾もあるらしいが、これは大丈夫だ。どれも市販のブツだから、相手が死ぬような事は無い」

「それなら、このスタンガン下さい。白いお洒落なの」

「あいよ。133ユーロ（1ユーロ＝1.5ドル＝150円と想定）だ」

「安い！！赤字になりませんか？」

「大丈夫だ。俺らに利益がくる最安価格だからな」
 すごい。これじゃ値切る必要も無い。

「そういやアッシュ。ちよつとした情報がある。悪いニュースだ。かなりヤバイ」

「何なに？」

「ええええええええ！！？それはやばいよ！？」

「『平和省』の下部組織である、民衆の監視を行う『安全庁』の中でも最も悪名高き保安官です。部下の金在鉉キム・ユヒョンは反対に心優しい人物で、アッシュも『安全庁』に捕まった時に良くしてもらったらしいんですがね」

「……分かった。ありがとう。気を付けて帰るよ」

さよならを言って帰る2人の足取りは、どこかぎくしゃくしていた。

夜、私 + アツシユさん + ジャクリー又さん + マイリーさんで『大戦無双?』をやってみた。結構面白い。

7時くらいにお客さんが来た。ウェーブのかかった栗毛にヘーゼルの目の美人さん。背は少し低いがグラマーなプロポーシオンで、肌が少々黒い。

「キャットちゃんじゃない！」

「Olive Branch」のメンバーだとか。

「確かお父さんがコックさんだったよね？今から料理作るから手伝ってー」

「そのつもりで来たの。 Pasta 持って来たよ」

そんなこんなのでアツシュさんとカテリーナちゃん
は料理に取りかかった。

今日の夕食はボロニア風ミートスパゲッティだった。美味しいもの。つすごく美味しい。パスタがもちもちだ。

「上手く出来てるね、良かった」

「アツシュミートソース作るの上手いねー」

コック本人達も満足気。

その時、電話のベルが鳴った。

「もしもし？」

『もしもし？キアラ？』

電話の相手はリーネちゃんだった。

「今戦い終わって戻ってきたの」

「……言ってくれよ。取材出来なかったじゃないか」

『いいじゃん。雑魚だったし。それよりも、病院が大変なんだ』

「どういう事だ？」

『Hestia』のマーリーちゃんからの伝言なんだけど、『安全庁』の保安官がここの病院に運ばれてきたんだって。手帳には……えっと、ネヴィル・アッテン……ボロー？とか書いてたとか」

「それはヤバいな」

早速みんなに知らせた。

「ええええええええええ!!?」

あらま。アツシュさん慌ててるな。

でもさすがにイレ－ネさんは通常運転だな。

「彼を狙って来たという可能性はありそう？ 仮病とか」

そのままそっくり知らせた。

「それは無さそうって言ってました。症状は実際に現われているようですし、そもそも救急車で運ばれて来たから病院を選べないとい

「う事で……」

「なるほど。じゃあ、今病院？なら私も行くよ。もしかしたらアッシュさんもついてくるかもしれないが」

『あいよ』

案の定、アッシュさんも行ってみるらしい。

夕食を食べ終わり、2人はカヴァリエーリ総合病院に向かった。

「で、そのネヴィルなんちゃらってどこにいるんだ？」

「ここ」

目の前の病室の扉を開ける。

中には2人の青年がいた。

「アッシュさん、久しぶりですね。お2人は初めましてですか。私は金在鉉キム・エヒョンと申します」

入るなりパイプ椅子から立ち上がって恭しく頭を下げたアジア人は、えー……20くらい？それくらいの、もうごくごく普通の青年だが、どこか人を惹き付ける魅力があった。すごく優しいそう。

「で、この人がネヴィルなんちゃらですか」

「ええ。私の仕事の先輩です」

金髪で色白の背が高い青年がベッドに横たわっていた。首筋や額の氷嚢ひょうそうが既にぬるくなっている程の高熱のせいか、顔は赤く、体もぐったりしている。息が荒く、頻繁に痰の絡んだ咳をしており、その度に涼しい美貌が苦痛に歪んでいた。

これで仮病の方がおかしい。

「数日前から微熱と咳を訴えてたんですが、私の勧めに応じず医者に掛からなかったんです。そうしたら今日道で急に倒れまして」

アッシュさんも、遠巻きながら病床に臥した男を見ていた。

「何の病気ですか？」

「分かりません。まだ診てもらってないので」

と、

「……ん……？ジェヒョン、どうした？」

ネヴィルさんの瞼まぶたが微かすかに動き、ゆっくりと目を開けた。

「大丈夫ですか？先輩」

「ああ、何とか……」

まだ意識は薄ぼんやりとしているらしく、青い目も虚ろだ。

「もうすぐで医者さんが来られるはずです」

「そうか。分かった……」

噂をすれば何とやら、ノックと共にロビンさんが入ってきた。

「失礼しま——」

部屋に入った瞬間、ロビンさんが固まった。

ネヴィルさんも、固まった。

「ネヴィル……君……？まさかとは思ったけど……」

「ロビン……さん……？」

翌日、私は非番なロビンさんと一緒にお茶をする事にした。

お昼過ぎになり、近くにあるカテリーナちゃんのお父さんが営業しているイタリアンレストランに入る。私はリゾット、ロビンさんはティラミス味のスピリッツ。最近、研究所近くの店でスピリッツが売られるようになっているらしい。

「これ、実はイレーネさんが味開発したんですよ」

あの人そんな事までしてるのか。

「ええ。一応みんな働いているんですよ。イレーネさんは主婦だから大体バイトですね」

……って、ん？後ろからアッシュさんとジェヒョンさんの声が聞こえるんだが。

「でも驚きましたね。マジ泣きするネヴィルさんなんて初めてですよ」

「先輩、元々は少し内気ではあるものの優しい人だったみたいですが……。泣いたのを見るのは久し振りですね」

あー、そういうばそんな事あったな。

確か、ロビンさんが入って来てベッドサイドに来るなり泣いて抱きついたんだっけ。

ギャップ萌え。

「そもそも、あの人何でああなったんですか？元々ではなさそうですし」

「色々ありましてね……。ちょっと不謹慎な話も混ざりますから、ぼかし気味に話しますね」

私とロビンさんの目がバッチリ合う。

（盗み聞きしちゃいますか）

（そうしますか）

目で語り合うと、2人バレないように後ろの話に耳をそばだてた。すると、大体こんな話が聞こえてきた。

「Neville」

ネヴィル・アッテンボローは、元タイギリスの片田舎の人間であった。

父は腕が良いが貧しい時計職人で、彼はその優しい父から溢れる愛情を注がれて育った。やがて彼は、そんな父の跡を継ぎたいと夢見るようになった。

——ただ、6歳の時にその父が病死してから、人生が狂い始める。というのも、父の葬儀のすぐ後に母は若い富豪と再婚したのだが、その富豪（ネヴィル自身が義父と呼ぶのを嫌がっているようなので、ここでもそれに倣った）というのが、最初は優しかったのだが、継子が美しく成長するに従い、……何というか、セクシャル・ハラスメント？をするようになっていった。

どうやら富豪は小児性愛者かつサディストだったようで、ネヴィル本人曰く、

『部屋に入れられた時、A Vを見て驚いた。ロリータ物とS M物ばかりだった。その事が分かるようになるのは後なんだが、あの10歳の時でも純粹に驚いたな。それが埃を被って積み上げられていた。埃まみれだったという事は、飽きたか満たされなかった、だらうな』

という事だ。

さて、流しかけてしまったが、10歳の時のある晩、ネヴィルはついに富豪の私室に連れ込まれてしまった。

『夜遅くに暗い廊下を歩いていたら、いきなり前に奴が現われてな。部屋に來ないかって言われたんだ。もちろん俺は嫌な予感がしていたから断ったんだが、私室に無理やり連れ込まれてしまった。必死に抵抗したが、押し倒されて……それから奴の思うがままにされてしまった』

その結果は読者諸君の思った通りだろうし、それはもちろん犯罪である。しかし、母に助けを求めても富豪に媚を売るのに必死で相手にされなかったし、何より、セクハラされた時に既に通報していたのだが、富豪が金で揉み消してしまったという前例があったので、表沙汰にはならなかった。

しかもこのような事は一度では終わらなかった。夜11時に彼の部屋のドアが叩かれた日には、必ずこの日と同じような事をされた。抵抗したい気持ちは失せなかったが、行動に移したらさらに酷い事をされた。

再三本人の話を引用すると、

『襲われている時には、体が麻痺したようになり、意識もどこか虚ろだった。悪夢の中のようなでな。仕舞いには魂だけが別の場所から自分を見ているような感覚に陥った』

これが16歳の日まで、毎日のように続いた。

だが、16歳のある晩、ついにネヴィルは我慢の限界となった。

その日は、襲われなくて良い日だった。

ネヴィルはその隙を突き、通帳の内1つと身の回りの物を持って、富豪と母を残して逃げた——家に火を放って。

警察に捕まる事を恐れていたが、どういう訳か指名手配すらされなかった。

彼はただ太陽の方向に向かって下って行き、その何日か後にはロンドンに到着した。この時既に悪夢・不眠、感情の委縮、襲われた

時の状況のフラッシュバック現象、自分でも過剰と感じるほどの警戒心などに悩まされていた。

その時、やはり緊張が頂点に達していたのだろう、信号で止まっている時に、たまたま近くで富豪に声がそっくりな男が、たまたまネヴィルという名前の息子を呼ぶのを聞いてしまい——怯えて車道に飛び出し、運悪く乗用車と接触してしまった。

彼は跳ね飛ばされ、ともに地面に体を打ち付けられてしまった。容易に「死」との言葉が頭をよぎった。

すると、目の前にいかにも優しいような女性が現われ、ネヴィルの顔を覗き込んで微笑みかけた。

「大丈夫よ。今助けてあげる」

その言葉に安心し、彼は意識を失ったのだが、気が付いたら病院で寝ており、言葉通り命だけは助かっていた。

ただし傷の状態は酷いわけでろくに動けるわけもなく、ただぼーっとしていると、あの女性が白衣姿で現われた。彼女はロビン・ウォルトンと名乗り、自分は医者だったと自己紹介した。

その後もロビンは、やはり助けた身だから気になるのか、しばしばネヴィルの病室に現われた。だが、彼としては、非番の時には何かと優しくしてくれるにもかかわらず、仕事の時には他の医者と同じようにしか扱ってくれない彼女が少し腹立たしかった。しかしそう訴えても、

「非番の時には本当の気持ちを出しても良いと思う。でも仕事の時には私は1人の医者として振る舞わなければいけないの」と諭されてしまった——本人は突っぱねられたと形容したが。それくらいもどかかったのだ。

ただし、退院後ロビンに自分は家も家族も無いと告白すると、彼女は「両親の意思」との名目で引き取ってくれた。彼女自身も少なからず感情移入していたようだ。

ネヴィルは彼女の両親にも好意的に迎えられ、ウォルトン家で2年間の歳月を過ごした。

『俺にとつては、実父が生きていた頃と同じくらい穏やかな日々だった。今までの人生の中でも一番愛しい記憶だ。もちろん、放火犯だと言う事を告白していない事に罪悪感を覚えていなかったというわけではないが、それを差し引いても楽しかった』

……しかし、幸福は長くは続かなかった。ある日突然終わらされてしまったのだ。

その頃、彼はロビンに淡い恋心を抱いていたもののいつ告白するか迷っていた。だがついに決心し、事件の起きた日の夕方、バイトして買った指輪と共に気持ちを打ち明ける事にした。ロビンは快くそれを受け取ってくれ、プレゼントした指輪も薬指に嵌めてくれた。その後の事だ。夜勤に赴いたはずの彼女がまだ来ていないという連絡が病院から入ったのは。

当然家族は心配し、あらゆる手段で彼女の携帯電話に連絡を入れようとしたが、通じなかった。

結局その日は失踪届を出すだけで終わっただが、翌日早朝に電話が掛かってきた。警察からだった。

——ロビンの死体を発見したという知らせだった。

彼女は腹を刺され、それ程奥まっているわけでもない道で倒れていたらしい。現場にはリングの種が大量に落ちており、犯人が撒き散らしたんだろうという事だった。それが後にヨーロッパ中を震撼させる事になる連続殺人鬼『Apple Seed』の最初の犯行だと判明するのはまだ先の事である。

ネヴィルは、天使のようだったロビンを殺した犯人を、天使が殺されるこの世界を憎んだ。

もうこの世で生きていく気は無い——思い余った彼は自殺まで考え、実際に死に場所を見つくれるべく家を出ようとした。ロビンの両親はそれを察し、娘も息子のようにだった子さえも失うのは嫌だと引き止めたが、迷った末ついに旅に出てしまった。

『安全庁』に入ったのも同時期である。せめて恨みを放出してから死にたい、それが動機だった。もしかしたら、心の奥底では救い

を求めていたのかもしれない。

ただ、その直後に、イレエネの裏人格のちよつとした悪戯心が原因で、ジェヒヨンと出会う事になり、彼は唯一の相談相手を得た。少しは救われたが、それでもこの時既に、ウォルトン家に入ってから治まっていた悪夢などが再発しており、周囲の人間には怒りが軽蔑、あるいは観察対象としての興味というような感情しか抱けなくなってしまうていた。

「Ch i a r a」

「……ねえ、その富豪って、誰なんです？」

そう聞くアツシュさんの語気は怒りに満ちていた。

と、

「——私も詳しく聞きたいです。その事について」

ジェヒヨン君と背を向け合っていたロビンさんが、突然振り向いて口を挟んだ。

その瞳は、何か煮えたぎる物を秘めていた。

ジェヒヨン君は目を丸くしていたが、アツシュさんは既に気付いていたらしく、やっと話しかけてくれたかと言いたげだ。犬以上に鼻が敏感らしいから、においで分かっていたのだろう。

ロビンさんは椅子から身を乗り出した。

「あの子にそんな思いをさせる人は許せません。教えて下さい。その富豪というのは誰なのですか？」

「すみません。それが、私も聞いていないんです。どうしても思い出したいくないと……」

ジェヒヨン君はオロオロしている。

「本当に知らないの？」

「はい。どうしても先輩が言いたくないと」

結局、残念ながらその富豪とやらの正体は分からぬまま2人と別れた。

ロビンさんはかなり残念そうだ。

「まあまあ。復讐するにしても、本人はそれよりもあなたには優しいままでいてくれる事を望んでると思いますよ」

「確かに彼ならそう言いそうですけど……」

どうも腑に落ちないようだ。仕方ない。

「帰ったらネヴィル君の様子を見に行こうかしら」

「私は家に帰って仮眠を摂らないと。夜リーネちゃんがまた信乃ちゃんと戦うらしいから」

次章から、「ハーイ！『鋼鉄花』主人公の最近夜行性生物になる方、キアラです！」って自己紹介してから書き出そうかな。

店から10分歩いた所に私のアパートがある。

駅から徒歩5分の所にある2LDK。部屋の一方は仕事場で、大きな机と本棚がある。もう一方は寝室で、リビングと繋がっている。でかい物置が便利。これで月8万くらい。築10年くらいで綺麗のにこの値段。幽霊も出ないし。

「フウ、疲れた」

寝室に入るなり、鞆と男装用コルセットを放り出してベッドに飛び込んだ。

信乃ちゃんの事、謎のパイロットの事、カーチャちゃんの事、ネヴィルさんとジェヒョン君の事、博士の事、ロビンさんの事、セルジオさんの事、イレエネさん一家の事、石原さんとミハイル君の事、ゆかいな『Olive Branch』4人組の事、ガウエインさんの事、そしてリーネちゃんの事が頭を駆け巡る。

ふと、リーネちゃんが、私の記憶の中にいる1人の少女と重なった。

まさか……いや、ただ同姓同名なだけだ。そんな虫の良い話があるか。

2人のイメージを引き離れた時、私は静かに眠りに就いた。

夜目覚め、慌てて洗濯物を畳むと、沸かしていたお湯でカップヌードルを作った。

第三次世界大戦直後には、核戦争で森林のほとんどが消滅して多くの生物が絶滅し、生態系が根本から破壊されてしまった為に、食物どころか水さえろくに手に入らなかった。

そのせいで貧民層は次々と餓死し、むしろ金持ちの家出身だった私（当時4歳）さえも空腹に苦しんでいた記憶がある。

だが、現在は放射線に強かった生物が絶滅生物の後釜を務め、森林も遅い所でも草が生え始め、早い所では低い木が伸びつつあるという。場所によっては、放射性物質を土壌から取り除くというヒマワリがたくさん咲いて綺麗だとか。海も浄化作用のある生物（カキとか）のおかげですっかり元気だ。

おかげさまで、今やスーパーやコンビニでも簡単に食料が手に入るようになった。ありがたやありがたや。

このカップヌードルだって、戦前とは中身が違っらしい。しかし、んな事気にしてたら負けだ。美味しいし。

「さて、今日はどうなるのやら」

シャワーを終え、身支度を始める。

カメラの充電はバツチリ。SDカードも2つ持った。スタンガンも一応入れとこ。他にも色々入れ込んで、と。

あとは、今までの余所行きよそいの小綺麗な服を洗濯機にぶち込んで仕事着に着替えて準備完了。

1回目の戦いがあれだったし、今日も期待……出来るのか？リーネちゃん、表人格が戦うって言うてたからな。どうなんだか。

出来たら、あの謎のパイロットの正体を掴みたい。そういえば、石原さんに爆撃機の写真見せたりときゃ良かった。あの人辺りなら知ってそうなのに。あるいは、ジャクリーヌさん&マイリーさんに。

その為には、もっと証拠写真撮っとかないとな。

「久し振りだな、カロリーネ」

「久し振り。今日は私が行くわ。九郎さんはお疲れなの」

数日ぶりに信乃ちゃんとリーネちゃん＆ガウェインさんが対峙した。

「なるほどな。私は良いぞ。あんたが強ければそれで良い」

「お嬢の実力は俺が保証する。一応師匠のような事をやっているからな」

「ならいいか。それじゃあ、この間中止された分思い切りやろうか！」

「お手柔らかにお願いするわ！」

言うなり、刀——いや、九郎さんに「薄緑」って呼べって言われたな——と十文字槍が鎬を削った。

新人の方が防戦一方になるかと思いきや、むしろ彼女が押しているようだ。玄人の方は斬撃を槍で受けるのみだ。

ついには、信乃ちゃんが壁際まで追い詰められてしまった。

「もらったアツ——！」

勝ち誇った笑みを湛え、リーネちゃんは「薄緑」を大上段に振りかぶる。

と、

「——それはこっちの台詞だ！」

信乃ちゃんが、彼女のガラ空きになった腹に槍をぶち込んだ。

「あつ……！」

腹から血を噴き出して崩れ落ち——そうになったが、何とか左手で傷を押さえて持ち堪えた。

「いいか？勝利を確信して油断した時こそが、人間が1番油断する時、つまり敵にとって一番奇襲しやすい時だ。完全に勝利を得るまでに気を抜くと、こうなる」

震える脚で立ち上がるうとする敵を、彼女は止めを刺すわけでもなくただ見守っていた。

「……何で、そう言う事を敵に教えるの……？」

「敵には出来るだけ兵^{つわもの}でいて欲しいからな。私は、敵を殺し合うものだと考えていない。むしろ、切磋琢磨するものだと思っている。あんたは、戦闘技術は私と同じくらいだろう。どこでそこまで鍛えたのかは分からんがな。しかし、まだ経験が浅いから使いきれないようだ。せつかく持っている物だ。使いこなさないと勿体無い」
「なるほど、ね！」

まだ力が入りきっていないであろう脚を^お圧して、リーネちゃんは突撃する。

そして、信乃ちゃんの脇腹へ斬りつけようとしたが、かわして逆に彼女の腹に槍を突き立てようとする。

すると彼女は、踏み止^{とど}まった勢いで踵^{かかと}を返し、逆手持ちにした「薄緑」で槍を受けた。そのまま柄をくるりと回して順手持ちに替えて横薙ぎした。

パキッ

「あっ！！」

その刃が、槍を先端から叩き折った。

槍の穂が飛び、リーネちゃんの頬を裂く。

「やるな、あんた」

信乃ちゃんは苦笑し、ただの棒になってしまった槍を背中に背負い、代わりに腰に差していた打刀を抜いた。

「こういう時もあるから、第二の武器は必須だな。白兵戦に向けた武器と遠戦に向けた物とを持っておくのがデフォルトだ」

「了解」

普通は慌てる所だが、彼女は既に落ち着いていた。

「お前さんは真の戦士のようだな。もう冷静になっているとは」
ガウエインさんも手放しで称賛している。

「落ち着いた？なら再開しようか。先々色々とありそうだから実践は重ねておきたいからね」

「お安いご用だ」

2人、再び対峙した。

と、その時であつた。

あのプロペラ音が、あの広場に響き渡つた。

鳥……飛行機？……いや、あの機関砲、派手な機体……間違いない、先日の爆撃機だ。

今日はすぐに攻撃せず、ゆっくり上空を旋回している。隠れた獲物がいないか探しているのだろう。

やがて機体は垂直落下し、地面に、そして私達に迫る。

そして、機関砲が火を噴いた。

皆飛び退つて避けたものの、レンガには血痕が滴り落ちていた。

爆撃機と『鋼鉄花』、どちらも金属の塊であるが、空からの襲撃に対して人間型はあまりに無力だ。

しかし彼らは逃げず、各々の得物^{えもの}を手に刺客を睨みつけている。と、

「おい貴様！一体なぜ俺達の邪魔をするのだ！！なぜ俺達をつけ狙う！！」

凜とした低い男の怒声が響いた。叫ぶ度に脚から血が流れる。

すると、機械を通したような女の声が聞こえてきた。

「私は、名は言えんが「Athena」の者だ。同族には「魔女狩りの魔女」「死神」などと呼ばれている。ハンドルネームはハンナだ」

「……知ってるよ私。うちでは有名だ。毎日のように、牛乳スピリッツをかつ食らつては、人間とアンドロイドを見分けるゴーグルを付けて、何ちゃらかいいうドイツ製の骨董品爆撃機に乗つて「鋼鉄花」を無差別に爆撃している凶悪犯だ」

信乃ちゃんが忌々しげに舌打ちした。

「私が君達を破壊しようとしているのは、君達が私の同族だからだ。表人格は後のセントマイケル帝国政府、「平和省」と対立する立場の人間だったが、奴らの犬である「安全庁」に殺された拳句、その記憶を「Ultrasonic」に売られ、無理矢理「Athena」にされた。したがって、対立していた者達の手下にされたとい

うわけだ。この境遇に彼女と私は怒り、「Ultrasonic」を逃げ出して彼等に復讐を誓った。だが、それには「Athena」が至極煩わしいのだ」

うん。どうも色々と勘違いしているらしい。

信乃ちゃんは少し苦い顔をしたが、すぐにキリツとした表情に戻り、リーネちゃんにこう告げた。

「屋上に逃げている。その男と一緒に」

2人はすぐに意味を理解したらしく、近くにあった1番高いビルに上った。

当の本人は、肩の傷に顔を顰めながらも空に向かって声を張り上げた。

「馬鹿だなあんた！！さっきの2人は『Psyche』っていう別の『鋼鉄花』だ！！私達の敵で、むしろあんたにとつては間接的な味方だ！！今ここにいるあんたの敵は私だけだ！！」

「何！？」

お、動揺してる。

「……まあいい。とりあえず、君が私の敵である事には変わり無いのだからな。それでは、早速死んでもらおう。辞世の句くらいは言わせてやろう。そこまで降りるのにタイムラグがあるから、その間にな」

そして、機体は急降下する。

標的になった少女は、それをじっと見つめていた。

機首がビルの屋上に届きかけた時、彼女は薄く笑って、

「もう一度言う！勝利を確信した時こそ人間共通の弱点だ！！」

その時、

「うおおおお！！！！」

ビルから1つの人影が舞い降り、爆撃機の風防目の前に刀を突き立てた。

リーネちゃんだった。

さっきのやりとりはこの為だったようだ。ガウエインさんも呼ば

れたのは、いざという時に彼女を投げ飛ばすように、だろう。

パイロット——ハンナは振り落とそうともがいているが、彼女は刀を抜き、機体から飛び退いた。

私は、もうシャッターチャンスの連続なもんで、ファインダーを覗きつ放しだ。

と、

「危ない!!」

いきなり信乃ちゃんに体当たりされ、押し倒された。

頭を強く打ってしまったので怒ろうとした——その時だった。

爆撃機が、轟音を上げて爆発した。

機体の破片が、地面にドサドサ落ちる。

火柱が上がり、夜空を照らした。

後に残ったのは、パチパチという火が燃える音と金属の塊だけであつた。

一瞬、瓦礫の中からハンナを捜そうと手を伸ばしたが、途中で手を止めた。憧れた人の無残な有様など見たくない。

皆似たような思いなのか、瓦礫に手を付ける者は1人としていなかった。

ふと、リーネちゃんがおもむろに懷から横笛を取り出した。

鎮魂歌のつもりなのだろう、綺麗な音色が笛から紡がれ出された。美しくも物悲しい旋律が夜のナポリを包み込んだ。

翌日、『Curiosare』の編集部に久々に顔を出した。最近この雑誌で『Psyche』の取材ルポ「鉄の真影」を連載したのだ。当然登場人物は仮名で、本人から許可も取ってある。実はこの連載が、この文章の元になっている。今と違うのは、まだ関係者からの話を聞いておらず、私の目線のみが文章に反映されている所だ。

「あ、編集長。お久しぶりです」

迎えてくれたのは、フェデリコ・ペルッツィ編集長。気の良いお

っちゃんだ。

「やあ、久しぶり。午後からランチしない？」

「ええ、行きますよ。昼食代を浮かせるためにね」

彼とは、もうかれこれ5年来の付き合いだ。既に気の置けない仲になっている。

「ところで、もう君のルポに感想が来てるんだけど、1つちょっと気になるのがあってね。直接君に見てもらいたいんだ」

早速、感想10通全てに目を通す。

例の感想らしき物は1番最後にあった。

『From・W・H・さん

早速目を通していただきました。

私自身、「鋼鉄花」とは浅からぬ仲なので、どこか懐かしい気持ちで読みました。

さて、デルヴェッキオさんのルポに出てきた「Psyché」のリーダー、イザベル・マルセイユとは、イレネ・モルゲンシュテルンの事でしょうが、はつきり言ってしまうと、あの女は危険です。もちろん、普段はご存じの通り大人しくて優しく上品な女です。

裏人格も悪い奴ではありません。私は彼女とは、裏人格の生前からの腐れ縁といえますか、大方敵同士だったんですが、それでも悔しいながら悪い印象はあまり無い人間です。

しかし、あの女は激昂させると何をするか分かりません。頭が良く戦闘能力が高い上怒ったら一時的に冷徹になるので余計にタチが悪い。私もあの女が怒り狂った現場に居合わせた事がありますが、それにより実に多くの人間が犠牲になりました。

取材をやめるとは言いません。個人的に連載は楽しみにしています。しかし、人間の心を持っているとはいえ、連中には人間の常識は通用しません。中には危険人物だっています。ですから、今後はこの辺りに留意して取材を行なって下さい。あなたの無事をお祈り

しております。』

私は知らなかった。

まさか、この手紙を再度思い出す日が来るとは。

「Ludwig」

「それじゃ養父さん、夜勤行つて来る」

「分かった。気を付けてな」

夕方、ルートヴィヒは少し早めに家を出ようとしていた。

彼は5歳の時養父のエドアルド・ヨハネ・カナヴァーロに引き取られて以来、ずっとヨハネ神父の仕事場であるサンタ・ルチア教会隣のこの家に住んでいる。

修道院は無い。科学と宗教の両立を説き、大人げない旺盛な反骨精神をもって、不条理と感じたらバチカンにさえも突っかかる神父のせいで、バチカンから疎まれていたのだ。

ただし、信者からの受けは良い。持論の筋は確かに通っている事、曲がった事が嫌いで律儀な信用出来る人である事、ポケットマネーをはたいてでも慈善活動を行い、さらにその功績が大きい事などがある理由だ。そのおかげで破門は免れているのだが、逆に教皇さえも頭痛に悩む原因になっている。

ルートヴィヒはこのような人の元で育ち、警察官を志したものの休日には家の手伝いをしている。幼少期からピアノが得意だった彼のオルガン演奏は信者にも人気だ。もちろん、彼らが皆ルートヴィヒを我が子のように見守ってきたせいもあるだろうが。

「最近治安が急に悪くなっているんだ」

「どこからか武器が密輸されているのかもな。しかし武器は悪くは無い。武器となりうる物を武器として使う者が悪いはずだ。爆弾も包丁も、殺傷も出来るが人の役に立つ事も出来る」

「そうだろうね。だから、物を悪用する人間は俺達が捕まえないと」

「でも気を付けろよ？」

「分かってるって」

彼は薄く微笑み、出発した。

最近ガキ共の落書きが増えている。治安が悪い証拠だ。しかし、その作者らしき若者が夕方は見当たらない。不良が夜大手を振って歩けないほど危険な街なのだ。

きっと、この黄昏時の薄闇たそがれどきの中、表世界には見えない所では魔物が唸っているのだろう。

まとわり付く闇に二の足を踏みそうになりつつも、ただ歩く。自分分は魔物を退治する人間なのだから。

——ふと彼は、路地裏から微かすかに聞こえる声に気付いた。

「何だ？」

もし密談だったら……そう思い、道に散らばる物を踏まないよう慎重に歩いた。

そこには、2人の男がいた。

1人は……30代後半？の、金髪碧眼で容姿端麗な、どこか中性的な男。もう1人は20代後半らしき、黒髪茶眼で色白の美形紳士。真面目そうな中に冷徹さをちらつかせている。どこかで覚えがある顔だが、思い出せない。

2人はボソボソと訳の分からない話をしている。銀虫だの福音だの。彼はむしろ頭が良いと評判の青年だが、意味が分からない。首を傾げていると、2人がこっちに向かって来た。

慌てて、しかしなるべく自然体を装って路地裏を抜け出す。

動悸が治まらないのを他人事のように感じつつ、仕事場へ向かった。

突き刺さる視線に気づかぬまま。

第三咲 因縁花（後書き）

例のごとく、またまた中途半端な所で終わりです。

ちよつとキアラちゃんが百合好きみたいな感じになっちゃいました。まあ、確信犯ですがね。

それにしても、ネヴィルの不幸さには私もドン引きします。ちよつと今回は書くのを躊躇しましたね。

……これ、利用規約に違反してないかな？

あーそうそう、新聞とかテレビとかで、放射能と放射線とごっちゃになってるっぽいんですけど、放射能ってのは放射線を出す能力の事ですから、全く別物ですよ。

ちなみに、「ハーイ！『鋼鉄花』主人公の最近夜行性生物になっている方、キアラです！」ってのは、タイ。二のもじりです。

次回は、キアラの正体を書ければいいかな。

第四咲 告白花（前書き）

よく考えれば、全然話が進んでいませんね。
なので、今回は話をぐつと進めたいと思っています。

第四咲 告白花

「Chiara」

ハーイ！キアラ＆リーネの夜行性化してる方、キアラです！（本当にやってしまった）

さて、まずはネヴィルさん＆ジェヒョン君（これからは保安官コンビとでも呼ぶか）の様子を見に行きますぜ！（今日の私のテンションおかしいな）

今は朝食の時間、ジェヒョン君がネヴィルさんにスプーンでスープを飲ませていた。はい、あーん的な^{てい}体で。

私を朝から興奮させてどうすんのさ。

カメラのシャッターを切りそうになる。というより、切ったと、

「キアラさん？何やってるんです？」

突然後ろのドアが開き、学校の先生みたいな口調の女性の声が聞こえてきた。

でも、聞き覚えある声だな。

「あ、ロビンさん」

あ、そっか。でもそれにしても声低いな。

「わたくしは『種』、つまり裏人格ですよ」
え、マジか。

名前を聞いてみた。超有名人だった。

「『Hestia』になってみてどうですか？」

「まーわたくし結構オバサンですし？若返れて万々歳ですよ」
それは何より。

「それにしても、看護婦——看護師？わたくしの代とはまるで違いますね。男の人も増えたし権限も大きくなったし」

「チーム医療ってやつですね。ただ、専門家同士の連絡が不十分だと、1人1人言ってる事が違うといった事態になるようですが、こ

ここではそれについて何か対策とかはなされてるんですか？」

「電子カルテは病院全体で共有できますし、院内専用電子掲示板のようなものでリアルタイムの相談も出来るんです。昔とはえらい違いですね。もう私が現役だった時は、わたくしが導入するまでナーズコールすら無かったんですもの」

そうか。この人そういう事もやってたな。

何だかんだ言いつつ、彼女は会話の合間合間に、昨日まで意識混濁状態だったネヴィルさんに改めて診療の結果を報告していた。さりとして、私のプチインタビューが疎かおそかになってるわけでもない。意識を集中させる方向を2つに分散しているのだ。

…… すぎえ。やっぱり歴史に残る人は違う。

「それでは、別の患者さんの所に行かないといけないので、今日はこの辺で」

「ええ。ありがとうございます」

「患者さんをいたずらに撮影してはいけませんよ」

去り際に、しっかり釘を刺されてしまった。笑顔で。

ううむ。やはり歴史人物は違う。

次にカーチャちゃんの様子を見に——行こうとしていたら、後ろから爆音が近付いてきた。

「おはようキアラ」

見るとその正体は、黒いライダースーツに身を包みハーレーをぶっ飛ばすリーネちゃんだった。

いつもは、ガウエインさん&マリッサさん&セルジオさんを選んでもらった少し薄い黒のパンツスタイルなのだが、今日は濃く引き締まった色だ。

「私結構黒にこだわる女だね」

そんな人いるのか。

「おお、キアラじゃないか」

セルジオさんが警備員室から顔を出した。

「今日も見に来た」

「あいつの事か？」

「何なに？」

あ、なんか首突っ込んできた。

「おい働けよ運び屋！」

「はい……」

怒られてすごすご引き下がったKYちゃんでした。

「あ、そうだ。昼仕事終わるから、午後からツーリング行かない？」

「いいぞ。どうせ暇だし」

「それじゃ、正午にここに、ね」

「あいよ」

リーネちゃんは再びハーレーに跨り、轟音を響かせて去って行った。

それを見送り、2人は警備員室の地下に降りて行った。

カーチャちゃんは、『Athena』の事を色々話してくれた。

「元々信乃以外には、『種』が無いつてことで虐められてたんだ。今さらどうでもいい」

アンドロイドも人間のように差別するのか。果たして、人間の影響か元の記憶の影響か。

「リーダーについては、あたしもよく分からないんだ。祠みたいな所に籠こもってて、滅多に姿を現わさないからな。あたしだって見たのは1回だけだし」

その1回の感想を語ってくれた。

「名前はオグナとか名乗ってたが多分偽名だろうな。30歳前後かな？古代日本の巫女装束……卑弥呼が着てそうなやつ……って、分かるか？そんなのを着てるチャン・ツイー似の美人だよ。噂じゃ相当する賢いらしい。『親株』の正体も不明で、処刑された凶悪犯とも、物腰は上品だって事から中国のある民族の王女とも言われている。実際に、策略を駆使して敵国の大将級の人物を皆斬殺した後自

殺したつていう王女がいるらしいからな」

本拠地についても語ってくれた。

「やっぱり『Ultrasonic』があるロサンゼルスだな。最近じゃ、提携しているセントマイケル帝国が首都造る予定だつていうメルボルンに移設しようつて案もあるよ。ただ、なぜか社長はナポリに執着しているらしいんだけどな」

「何でだ？」

「こつちが聞きたいよ。でも、戦う当の本人達の中で『Psych e』全体あるいは個人に恨みを持っているやつはほんの一握りだつて事は確かだ。それにしては、社長の固執っぷりは異常だ」

「理由は？」

「うーん……。あたしらの間じゃ、シュタイナー博士にどんどん開発を先取りされてたからつてのが定説だな。2028年の事件のせいつて言つてるやつもいるけど。あと、最近じゃ私と戦つたあいつ……カロリーネ・フォン・メンデルベルグ？との確執もあるつて……。そいつと社長の姓が一緒だつていうから、案外親類だつたりして」

「姓が一緒！？その社長つて名前何ていうんだ？」

「ヴィーラント・フォン・メンデルベルグ」

聞き覚えがある名前だ。

……あいつでない事を望む。

「そりゃ、調べておいた方がいいかもな。色々貴重な話をありがとう」

そうして、2人は部屋を出た。

私は、幼少期の記憶を頭から振り払うのに必死だった。

時間があつたので、リーネちゃんが戻ってくる12時までモルゲンシュテルン一家の部屋に入れさせてもらった。5階建ての最上階だ。

アッシュさんもなぜかいて、ベルンハルトさんと他愛^{たわいな}無い話をし

ている。その横で私は、イレーネさんの新作スピリッツのデザインを考えていた。ロツテちゃんはアッシュさんの白鳩、デービスと遊んでいた。デービスは彼女にじゃれつかれても、攻撃するどころか大人しくしていた。本当に賢い鳩だ。こいつよりアホな人間なんてザラだぞ。

「あら。こんな時間に誰かしら」
ふとノック音がした。

女2人（少女は除く）がドアを開けると、そこには『Psych e』なりたてホヤホヤの若い女の子——確かマリーだったっけ？が立っていた。手紙を持っている。

「どうしたの？」

「あの……これを……」

「何これ。題名的に意見文かしら」

「はい……。リーダーもご存知でしょうが、私達は大方の人間達に理解されておらず、ゾンビ扱いする事も少なくありません。なのになぜ理解を求めるよう行動しないのか疑問に思いました。それに、先輩方、特にカロリーネさんやガウエインさんは進んで『Athena』と戦っているのに、なぜリーダーは何もしないのかという意見もありました」

「なるほどね……」

彼女は繰り返し頷きつつ紙に目を通す。

「まず、理解を求めない理由？実は大分前、1回本当の機密以外を全て公表した事があるのよ」

「え！？」

ま、新人さんなら知らなくても仕方ないか。

「で、それで何も進展は無かったわけですね。今の状況を見るに」
「——どころか、生物にほぼ近い物を作ったという事で、創造主を穢^けしたとカトリック教徒を中心にした連中から叩かれたわ。バチカン^ンは、私達が自己複製、つまり生殖出来ないという事もあってか、あるいはロボットを認めたという前例があるからか何も言わなかつ

たのに」

「えー……」

マリーちゃんは当然ガツクリ肩を落とした。

「で、なぜ私が戦わないか、ね。よく聞かれるのよ」

そう言つて、イレネさんはおもむろにシャツの袖を捲くつた。

「ちよつと、と言うよりかなり細いでしょう？」

「ええ……。でも元々なんじゃ——」

「——これね、一部腕の筋肉を抜かれてるの」

「！……！」

ギョツとして、ニコニコしている彼女を凝視した。

彼女はクスリと笑つて、腕の内側を見せた。

そこには、脇から手首を縦断する大きな傷があつた。

「本当はやむを得ない事情があつて皮膚を取り替えたから本当の傷は残っていないだけだね、大体同じ場所を自分で斬つたの。——

あの時の事を忘れない為にね……」

「あの時？」

マリーちゃんの素朴な疑問は、私と全く同じものだった。

「いつか2人にも話すわ。でももう少し待つて。『Ultrasonic』が恥として隠蔽した事件だからあまり大声では言えないの。ただでさえ連中に睨まれている状況だからね。とにかく、そのせいで重い物が持てなくなつて足手まといになりかねないから戦わないようにしているの。これだけは教えるわ。いつか話せる日が来れば言うから、ね？」

結局、何があつたのかは聞けなかった。

ただ、珍しい憂いを帯びた相好から、さんたん惨憺たる事態だったという事は推測できる。

……機会があつたら取材してみよう。

ところで、さっきからマリーちゃんがどこかそわそわしているんだが。

「どうしたの？ 悩みがあつたら言つて」

すると、彼女は申し訳無さそうにイレネさんをちらつと見た。
「……あのお……。私の『種』は、イギリスでは相当嫌われているらしいんです。それで、友達にイギリス人がいるんですけど、そのお父さんが『種』の事が大っ嫌いで、もう1回火あぶりにしてやるって言ってるんです。このままじゃあの人、もう1回火達磨ひたるまになります。何とかして下さい」
「ぎゃふん」

昼になり、リーネちゃんが戻って来た。

ツーリングと言っても、私はバイクも原付も持っていない（AT免許は持っているが）。研究所も、近いから徒歩で来ている。

というわけで、リーネちゃんの後ろに乗る事にした。

「ちよちよちよー！！スピード出し過ぎでしょうが！！さすがに公道で80kmはダメでしょー！！」

「だいじょぶだいじょぶ。それでも現役時代は『疾風の狂犬』ってここら辺では有名だったんだから」

「何の現役！？」

「いやー。それにしても愛人やってた時より捕虜になってた時の方が自由ってのはどうなのよ」

「知るか！！何やってたんだよ！！」

「あー。なんなら九郎さんに替わろうか？鵜越の逆落としゃった人だけ」

「お願いしますやめて下さいてかあの人バイクの運転の仕方なんて知ってるんですか」

なす術すべも無く、彼女の背中にしがみ付く。

頭がグルグルしている間に、バイクは駐車場で止まっていた。

「そんなに怖かったらここから歩こつか。どうせブラブラしたいし」

「ぜひそうしてくれ……」

もう頭の中力オス。

フラフラしながらついて行くと、やがてお洒落なブティックに辿

り着いた。

「ちょうど誰かと来たかったんだ。服選び付き合つてよ」

何だかいつもより明るい。カップルみたい。

ふと、腕に何か暖かい物が絡み付いた。

見ると、それはリーネちゃんの腕であった。

「私最近フラワードレスとかいう服が欲しくてね」

「何だそれ」

「裾が薄い生地が重なってるフレアスカートみたいなんだけど、その生地にグラデーションが付いてて、本当に花みたいなワンピース。涼しいし綺麗して流行ってるんだって。ほら、あの子が着てるアレ。可愛いでしょ？」

確かに、薄い白の生地から奥のピンク色が見えるのはそそる。風が当たると裾が舞い上がってグラデーションが露わになるのも綺麗だ。

着ている本人も美人さんだ。日本人だろうか、知的な茶色の目に白い肌、ストレートの長い黒髪はその手のマニアには堪らない代物だろう。ワンピースとカーディガンの相性は抜群で、お嬢様みたいだ。

——あれ、どっかで見覚えが……。

と、横のリーネちゃんが、口をパクパクさせながら少女を指差した。顔面蒼白でワナワナ震えていた。

「し……信乃！！？」

そこにいたのは、あの飛行機運の悪い、彼女のライバルにして最大の敵の1人、九度山信乃ちゃんであった。

マズイ。さすがにこんな所で暴れられては大弱りだ。

「そう慌てるな。生憎今日は丸腰だ。戦いたくても戦えない」

「こつちもね。今日はただ単に遊びに来てるし。あなたが今着てる服が欲しくてね」

「……これか？あつちにあつたぞ？」

「ホント？」

……あれ？なんか丸く収まってる。

「この水色なんてどうだ？」

「いかにも涼しそうだし、いいんじゃないか？」

「さすがにライバルとペアルックはアレだしね。……黒は無いの？」

「暑苦しいわ。ついかどんだけ黒にこだわる？」

「トコトンまで」

「試着してみたらどうだ？黒ではないが、これもいいぞ」

「それじゃ、早速……」

残された私達は小声で囁き合う。

（ぶっちゃけ、あの子の事どう思ってた？）

（良いライバルだ。あいつは伸びるぞ。……ところであんたとあい
つってどういう仲なんだ？ずっと気になっていたんだが……）

（私はフリーライターでな、あの子達を取材している）

（はー。それじゃあ血縁関係は無いのか。似てるけどな……）

（ん……。一応な）

「どう？これ」

リーネちゃんが、水色のワンピースを纏って出てきた。

単純に言おう。可愛い。

「似合ってるぞ、やっぱり」

「そう？」

まんざらでもないらしい。

とても先日戦ったと思えない。

「これも合わせてみたらどうだ？」

「レースのボレロ？いいかもね。お金的にも大丈夫だし、思い切っ
て買お。キアラはなんか買わない？」

「いいよ。まだ男の恰好は続けるつもりだし」

レジで精算し、店を出る。

「良かったらナポリ案内してくれないか？来たばかりなんだ」

「良いよ。この近くなら………サンタ・ルチア教会でも行ってみ
る？ここらじゃ超変わり種って有名だよ。バチカンに化学と宗教両

立しろって訴えてたら、弟子がいなくなっただんだけさ」

「よくそなので潰れないな」

「でしょ？だからいかなる物が見てやろうって思ってた」

「それなら行ってみるか」

本当に友達みたい。

歩く事10分足らずで、小さな教会が見えた。

「どうもここつばいな」

教会の前には『Santa Lucia Chiesa』とある。

「入っても良いのか？」

「『どうぞご自由にお入り下さい』って書いてあるけど」

遠慮なく扉をくぐる。

そこにあつたのは、意外や意外、他の教会と比べても見劣りしない神聖な空間があつた。

木の椅子がズラリと並び、祭壇には大きな十字架、燭台、説教台、大きなパイプオルガンがある。

そしてそのオルガンの前に誰か若い男が座り、何やら練習している。その横で黒いローブに身を包んだ神父らしき人物が見守っている。

「——おや、どうなさいました」

ふと、神父？が私達に気付いて振り返った。栗毛にアンバーの目の、いかにも賢そうな壮年の男性だ。50歳くらいか？

同時に、オルガンの前に座っていた青年も手を止めて振り向いた。

黒髪茶眼のチビ……って、あれ？

「え……。もしかしてあの時の警官？」

「ん？——ああ、そうですよ。デルヴェッキオさんでしたっけ？カ
ルロ——あのノッポが気に入ってたんで知らず知らずの内に名前を
覚えたんですよ」

何とそこには、リーネちゃんがマルディーニ・ファミリーに対し
て「やらかした」時にお世話（笑）になったチビ警官がいた。名前
は……何だっけ。

「ルートヴィヒ・カンナヴァーロです。この人はヨハネ神父、私の養父です」

なるほど、父さんの手伝いか。偉いね（子供扱い）。でもあっちの方が1歳年上らしい。

「ちよつとこの子がナポリ案内してくれって言つもんですから寄つてみたんです」

「それならどうぞ。小さいですが見て回って下さいませ」

なんだ。神父の笑顔を見るに、良心的な教会っぽいぞ。

「あの……少しうるさくなりますが、練習は続けていいですか？」

「どうぞどうぞ」

カンナヴァーロ巡查（……で合ってるよな……）はホッと息を吐き、鍵盤に手を伸ばした。

教会全体が、天使の囁きを彷彿とさせる清らかな旋律で包まれる。

「良い音色ですね。腕も相当のようで」

音楽に造詣の深いリーネちゃんはうつとりと溜め息を漏らした。

一方の信乃ちゃんは、祭壇の壁に掛けられた十字架に目を向けていた。

「どうしたの？」

「……いや、死んだ親父が、軍人の癖にいつも首から十字架提げてたなって思い出したんだ……」

その影のある笑みに、思わず口をつぐんだ。

「ちよつと話したくなつたから、いいか？……親父は昔日本陸軍じや最強つて言われててな、私もそんな親父に鍛えられてた。だから昔から喧嘩は強かったな。そんなある時、親父が軍の派閥争いに飛び込んで、ついにはクーデターまで起こした。私が19の時だ」

「勝つたの？」

「いや、負けた。質じゃ反乱軍の方が勝つてたが、量はあるこちらの方が遙かに上回っていた。親父は逮捕され、処刑は免れたが自宅に軟禁された。私も監視の対象だった。……その1年後親父が死んだんだが、日に日に徐々に体調が悪くなっていくもんだから、これはお

かしいと試しにその食事つまみ食いしてやったんだ。そうしたら私も気分が悪くなつてな。……毒が入ってたんだ」

「知らせなかったのか？」

「知らせたよ。それでも買い物にすら行けなかったから、それを食べるしかなかったんだ。私の食事半分食べるかって言っても、親父、『いや、お前さんと食べ』って……」

「で、亡くなったわけだ。でもあんた、もう死んでるんだろ？何があつた？」

「軍連中に復讐しようとして、ちょうど聖ミカエル島に住んでいたから、その日本軍基地を襲撃した」

「——えっと、お言葉ですが、何でそういう事になったんですか？」
神父がふと話に入ってきた。

「親父はあいつらに、顔に泥を塗られた。だからです」

「……よく分からないですが……それはいいとして、どうなったんですか？」

「陸軍連中は、倒すのは容易でした。エリートばかりのはずなのに、です。少し失望しましたよ」

そりやそうだ。信乃ちゃんみたいな精鋭ばかりでたまるか。

「最後に戦ったのは、私の抹殺命令を請け負っていた『Athena』の1人でした。鎧ヶ原平八郎っていう、同じ槍使いです。全く敵い^{かな}ませんでしたよ。何せ相手は、表人格も裏人格も生涯無敗の戦の申し子なんですから」

そんな人いるんだ。

なら何で『鋼鉄花』になった？

「後に聞いた話じゃ、ある富豪の御曹司のボディガードをやっていて、主人が襲われた時に致命傷を負って、その後刺客を全員倒してから死んだみたいだ。——私は軍人共に殺されましたが、平八郎自身はその結果に納得していなかったらしく、私の骸^{むくろ}を持って『Ultrasonic』に行ったらしい。そして復活したわけだ」

「——うーん……。復讐にしてももう少し方法があつたのではない

ですか？法律に頼るなど、他にもやり方はあつたと思いますよ。明らかに貴女のお父様のケースは犯罪ですし。それに、例えば日本軍を全滅させたとしても、お父様は蘇生しません。自己満足に終わるだけですよ」

信乃ちゃんは、びっくりしたように神父を見つめた。

「いや、でも例えば、そこにいる若い人が誰かに殺されたとしますよ？そうしたらあなたはどうするんですか？ずっと手を拱こまねいて、警察が何とかしてくれるまで待っているんですか？」

「それはしませんよ。出来るだけ捜査には協力します。法医学もかじっていることですし。しかし、その犯人を殴るうとも、増してや殺そうとも思いません。元来傷病人を治す立場であることも原因でしょうが、それよりも、こういう事をしたら相手がどうなるって、先に頭で考えてしまうんでしょうね。だから、自分がされたくない事は他人にも出来ないんです」

「……………」

確かに正論だ。

しかし、石頭どもが揃い踏み（例外もあり）な、しかも閉じられた組織である軍隊の中で、そんな正論が通じるだろうか。

あと、リーネちゃんがすごく耳が痛そうだ。

「……あ、すみません。気分を悪くされましたか？本当に申し訳ございません。自分の主張は人目を憚らず言ってしまうタチなんで」「いえいえ。むしろ参考になったかもしれません。ありがとうございます」

「それなら良かった」

うーむ。神父は結構単純らしい。でも間違いなく良い人だろう。

「——あら、ここがカロリーネのいる教会かしら？」

「……！！？」

突然の乱入者に、私達と信乃ちゃんが眉間に皺寄せ、開け放たれた扉の向こうにいた人間の影に目を凝らした。

黒髪で色白の美しい少女。リーネちゃんと同じくらいの歳だろう。

茶色の目だが、左は無骨な眼帯で覆われている。将校クラスだろうか、くすんだ緑色の軍服に身を包んでいる。本人は貧乳だが色気たっぷりなのに、服がそれを隠してしまっている。もったいない。まあ、こつちもなかなか良いんだがな。

彼女は、教会内を値踏みするように見渡した。

「カロリーネ・フォン・メンデルベルグはどちらかしら？」

見た目に似合わず、声は随分と色っぽい。

「——ここよ」

キツと口を引き結んだリーネちゃんが、ザッと一歩前に踏み出した。

少女はニヤリと笑う。

「私はシャルロッテ・フォン・ヘルメスベルガー。貴女を子供の頃から追っていたわ」

「ヘルメスベルガー……！！」

ギリリと歯を食いしばるメンデルベルグ家の少女からは、怨恨の色がはつきり見て取れた。

一方のシャルロッテからも、それと共に執念が滲み出ていた。

「本当なら今すぐにでも決着を付けたいところだけれど、さすがに丸腰の人間に勝負を挑むのはプライドが許さないわ。ですから、今夜決闘を申し込みたいの。１１時に廃王宮に。よろしいかしら？」

「受けて立とうじゃない……！！」

「良かったわ。それなら今夜、また会いましょう」

「ええ。あなただけじゃなく一家全滅させてやるわ！！」

「やれるものならやってみなさい」

２人互いに睨み合うと、踵かかひすを返して、真反対の方向へ歩いて行った。

夜、私達２人は、かつてナポリ随一の観光地だった王宮の廃墟に来ていた。

戦前は、外見に似合わず内装が豪華絢爛な事で有名であったが、

今や宮殿内劇場も大理石の大階段も、瓦礫だらけで見る影もない。
その大階段の頂上に、シャルロツテはフランベルジェ（刀身が波打った剣）を杖に立っていた。

リーネちゃんは、相手が防具を使つてないと知り、鎧（私が取材するようになってから、兜は被つて無かった）を付けずに来た。スパイみたいにスマートな黒いパンツスタイルと手に持った「薄緑」が、ミスマツチでありながらかつこいいい。

「待ってたわ……貴女と戦う日を！」

「いい加減逃げ回るのは鬱陶しいわ。あなたと決着を付けたら次は当主ね」

「お父様の所までなど生かせはしないわ」

「どうなんだかね。……というか、その字はわざと間違えたの？」

一見すごい温度差のようだが、どちらの心も激しく煮え立っているのが、間近では分かった。

「——さあ、邪魔が入る前にケリをつけましょう！」

「そうね。意外とこういうのって邪魔が入るものなのよね。新たな敵とか雑魚とか飛行機とか」

「ひこつき？」

「詳しくは信乃つて子に聞いて」

「……まあ、いいわ。それじゃ、行くわ、よっ——！」

シャルロツテが、剣を大上段に振り上げて階段から飛び降りた。

リーネちゃんはそれを刀で受け、そのまま横に薙ごうとする。

しかし相手はそれを受け流し——剣を彼女の胸に突き立てた。

波打った刀身が、皮膚と筋肉を引き裂く。

「あ……ぐっ……！」

彼女は悲鳴を堪えて刀をくわえて、そのまま両手で剣をぐっと持ち、自分の肉体から引き抜いた。

幸い傷は浅い。

「よくもやったわね！」

リーネちゃんは刀を持ち直し、相手の肩に斬り付けた。

「このっ……!!」

シャルロッテは肩を押さえ、ギツと敵を睨み付けた。

「あらま。あなたすごい怖い顔よ。お嬢様とは思えないわ。畜生みたいじゃない」

お前が言っな。お嬢様らしくないとか。そして精神攻撃に肉体攻撃を追加なんてするな。

迫って来た刀を払い斬りかかるシャルロッテの目は笑っていなかった。

「……そうよ、私は畜生よ！貴女を討つべく、鉄の肉体を得た貴女に対抗すべく自分の体を捨てた、貴女と戦うしか能の無い畜生よ！でも貴女はどう？私達一族と自分の兄を討つことしか考えていない畜生じゃない!!」

その時、リーネちゃんの顔つきが恐ろしいそれになった。

「——私の前であの下衆げすの話をするんじゃないやねえっ!!」

彼女は、品も恥もかき捨てて、目を？き、獣のごとき咆哮を上げてシャルロッテに襲いかかった。

ガキン、と、鋼がこすれ合う音。

剣と刀が、本当の意味で鎬しのぎを削っている。

「貴女って本当に可哀想ね！お兄様すら信用出来ないなんて！」
再び、刃と刃がぶつかり合う。

「ハッ!!笑わせないでよ!!」

リーネちゃんが荒々しく鼻で笑って、「薄緑」でフランベルジェを払い除けた。

日本刀の方は無傷だが、フランベルジェは齒こばれが酷い。次に攻撃を食らったら折れてしまいそうだ。

本人もそう悟ったのか、折れかけた剣を捨ててショートソードを構えた。

それでもリーネちゃんは慌てもしない。

「私はお兄様を信用してないんじゃない、自分から捨てたのよ！今じゃ憎いだけだわ!!」

「――へえー……。そうなのか」

突然、若い男の声が聞こえた。

「なっ……………!!」

「何でここに!？」

皆、ギョツとして階段の頂上に目をやる。

そこには、黒髪茶眼で色白の、20代後半と思われるスーツ姿の男がいた。柔らかな微笑みを浮かべているように見えるが、どこか貼り付けたような感じがあった。

「いやあ、君を観察していて良かったよ、シャルロッテ。おかげで、2人もの人間に再会出来たんだから」

高い靴音が響く。

青年はゆっくり階段を降り、シャルロッテに歩み寄った。

「その声は……………」

訝しげに青年を見やる彼女。

彼はニコリと笑って頷いた。

「ああ。…………でも、最初は驚いたな。まさか僕の元にヘルメスベルガー家の人間が来るとは。ま、僕が名前を公にしていけないからかもしれないけど」

「…………は？」

青年は、微笑みを崩さぬまま続けた。

「――僕の名はヴィーラント・フォン・メンデルベルグ。そのカロリーネの兄であり、『Ultrasonic』の社長であり、メンデルベルグ家元当主ヴォルフガングの長男だ」

「え……………!!」

彼女は放心状態に陥り、剣も取り落としてしまった。

「本当にびっくりしたよ。僕の妹を倒すためにって言って、わざわざその兄の所に来るんだから。でも僕だってカロリーネは排除したいから、大いに利用したけど。ちなみに君のオリジナルは社内に監禁している。その時の記憶が無いのは当然だよ。すり替えたんだから、記憶。ま、窮屈な生活?はしているけど無事だから安心してく

れ。——おっと」

彼は、あくまで表情を変えずに、リーネちゃんの「薄緑」の鋭い突きをかわした。

彼女は舌打ちし、忌々しげに睨み付ける。

「あなたって本当にろくでなしなのですね！血が繋がっていると考えただけで反吐^{へど}が出ますわ！」

青年は鼻で笑うのみだ。

「お前は相変わらず頭が硬いというかお人よしというか。人にろくでなしと言われる人間が社会的には成功するんだよ。周りを見てみる。高い地位にある人間の中に、一般的に下衆と言われている人間がどれくらいいる？いるモノは大いに利用して、いらぬモノはあっさり捨てる。これが生きていく秘訣だ。——例えば、こんな風に」すると彼は、妹に目を向けたまま、何の躊躇も無く、力が抜けきっているシャルロッテを階段から突き落とした。

ドタドタと音を立てて、彼女の体はなす術^{すべ}も無く転げ落ちる。やがて1番下に着くと、力無くゴロリと横たわった。

「他愛無いな」

そう吐き捨てた加害者が次に向かったのは、私だった。

……やはり、カーチャちゃんに彼の名を聞いた時の確信は間違っていないかったのだ。

よりによって、こんな時に……！！

ここぞの時のスタンガンを取り出し、目の前に突き付ける。

「近付いたら……分かってるな？」

しかし、男が向けたのは、掌^{しやうちゆう}中の珠^{たま}を愛^めでるかのような狂おしげな笑みだった。

「そう言うな……」

彼は——経験上予想はしていたが——突然私を抱き締めてきた。気が動転して、腕を振りほどこうと身をよじるしか出来ない。

「ちよっ！放して……！」

「ずっと会いたかった……。クララ——僕の愛しい妹……」

「！！！！？」

リーネちゃんがギョツとして、私を穴が開くほど凝視しているのが心配で分かった。

「クララ……お姉様……？」

彼女の涙混じりの声色に、罪悪感が頭をもたげる。

ヴィーラント——兄様の腕の力が弱くなってきたので振りほどき、ハラハラと涙をこぼす妹を抱き締めた。

「なんで……っ！何で言ってくれなかったの！？分からないじゃない！名前変えちゃってるし、8年前に離れたつきりになってたんだから！」

「ごめんな……」

愛しさがこみ上げ、さらに強く抱き寄せて頭を撫でた。

「もう。昔っから怒ったらすぐに泣くんだから。……あのな、少し事情があつて偽名を名乗らざるをえなかったんだ。それに、実は私もリーネだつて分からなかったんだ。カロリーネってのは珍しい名前じゃないし、何より随分と変わってしまったからな。——出来る事なら、生きてる内に会いたかった……」

腕の中の妹が頷くのを感じた。

彼女も、私の腰に腕を回してきた。

「私もそう。でも、今会えただけでも嬉しい」

2人、幸福に浸る。

と、

「お嬢！！危ない！！」

凜とした声と共に、金属がぶつかる音がした。顔を上げる。

そこには右手を押さえる兄様と、その目の前で鉄パイプを持つて仁王立ちになったガウェインさんと、弾かれたらしい地面に転がるナイフがあつた。

どうやら、兄様がリーネを刺そうとしたのを彼が助けたらしい。「ありがとう。助かった」

妹はニコリと笑って彼を見上げた。

「いや。造作もない事だ。……それで、あの娘さんは誰だ」

「私達一族の宿敵である一族の娘よ。あの子も『Athena』だから、そこら辺に転がしておいても大丈夫だと思うわ」

「なるほど」

静かに頷くと、彼は兄様と対峙した。

「俺はガウエイン・ウォリック、カロリーネと同じ『Psyche』であり、彼女のパートナーでもある。もし彼女に手を出すと言うのなら、まず俺が相手になろう。さて、どうする？」

闘志が、確かに溢れ出し、ほとばしっているのを体を感じた。普通の人間ならここで逃げ出してしまうだろう。

しかし兄様は表情も変えずに、腰に差した拳銃を取り出し、いきなり発砲した。

それでも相手も猛者、涼しい顔で、鉄パイプを振り回して弾を弾き返し、敵目掛けて得物を投げた。

銀色の凶器は真っ直ぐ敵の首に迫る。

兄様はそれをバック転でよけ、間合いを計る。ガウエインさんも考えあぐねているようだったが、キツと顔を引き締めると、背中に背負った薙刀を手に意を決したように猛スピードで突撃した。

敵はなおも冷静に狙いを定めて迎撃する。ただ、その銃弾は薙刀によって斬り伏せられてしまっていた。

ガウエインさんはニヤリと笑い、首を狙って斬りつけようとした。しかし、

「——あら、何をしているのかしら？」

今度は階段の下から、上品な女性の声がした。

「姉御!？」

「や、ヤツか!?!？」

イレエネさんだ。頼りになりそうだが、問題は戦闘能力がどれくらいかだ。

それにしても、兄様の反応が過剰だ。真っ青になって、全身がワ

ナワナと震えている。

「お前……本当に生きていたのか……？」

「ええ。そもそも私達は修繕不可能にならない限り、『死』という概念自体に縁が無いのですよ。軍需会社の社長たるもの、ライバルであり武器でもあるものの情報は仕入れておかなくてはいけないんじゃないありませんの？」

震える手ながら銃口を突き付けられているにもかかわらず、彼女は余裕綽々だ。

兄様の身長は180cm、私よりさらに5cm程高い。一方のイレネさんは160cm前後。ところが、オーラとやらが何かの差か、イレネさんの方が存在が大きいように思えた。

「え……。姉さん、お兄様と知り合いなんですか？」

「そうね。一応知り合いよ。敵同士でね。2028年からの仲よ」

「確かに、どんな事でも、必ずと言っていい程君が邪魔をするね」
そう言う彼の語調には、明らかに敵意と怒り、憎しみが籠っていた。

「君の父もそうだった。やる事なす事全てが我々の障害だった。だから、『Psyché』共々葬ってやった。……ああ、ちなみにあの時鹵獲した君達のリーダーだが、あれは実験に使わせてもらったよ。おかげで『Athena』改良が思ったよりスムーズに行ったよ」

その時だった。

「——へえ……」

場の空気が、凍り付いた。

彼女はいつも通り笑っている。

しかしそれは、処刑道具が笑ったらこうなるだろうと想起させるのに、あまりにも相応しかった。

「だから私の両親と仲間を殺したの？その上生き残りは実験台？」

刹那、一瞬風が途切れた。

次の瞬間には、イレネさんは兄様の目と鼻の先にまで間合いを

詰め、彼の額に銃口をねじり込んでいた。

空気が再び動き出し、肌を撫でた。

ずっと観察していた私でも、彼女がいつ動いたのか、見えなかった。

第三者でさえ戦慄したのだ。当の本人は全身を硬直させることしか出来ない。

「貴方、いくら私を怒らせれば気が済むのですか？よっぽど死にたいらしいですね。何なら、今ここで殺してあげましょうか？大丈夫、今なら頭ふっ飛ばすだけで楽に死なせてあげますよ？ねえ、聞いてらっしゃる？」

引き金がゆつくりと絞られた。

見かねたガウエインさんが、彼女を諭した。

「それくらいにしておいて下さい、姉御。感情的になつては損をするだけです」

「……ああ、そうね……。ごめんなさい。少し激昂してしまつたわ。やっぱり駄目ね。幼馴染の話になると」

彼女はどこか寂しげに笑うと、兄様の額を銃口から解放した。

彼は苦笑いしながら緩んだネクタイを締め直した。

「かなり格好悪い所を見せてしまったな。……まあいいや」

すると彼は、おもむろに階段の手すりを乗り越え、飛び降りた。

「それじゃ、また会おうか」

「……っ！……ちよつ、待て！……」

リーネは激怒し、抜き身の刀片手に飛び降りようとした。慌てて止める。

「やめろ！後追いするな！」

彼女は悔しそくに唇を噛み、刀を鞘に収めた。

「さ、帰ろう。早い事充電しないとな」

妹は拗ねながらもコクリと頷いた。

「——で、キアラ、いや、クララは何で男装してたんだ？」

「マイリー。そういう事を聞くのはやめなさいってば」

「いいんですよ、アッシュさん。実は、どうも兄様は私を偏愛しているらしくて、中学入りたての頃に彼に襲われて……。なんとか逃げたんですけど、もうそんな気を起こさせないようにって、防衛の為に男装したんです。そうしたら、仕事にも役に立つちゃって」

「でもその話によると、お兄さんはまだ諦めていないみたいだね」というより、ヤンデレじみているわよ」

「人の兄弟をこう言うのはどうかと思うけど……キモイ」「でしょうねえ」

朝、『Olive Branch』3人組+ミハイル君とで、遅めの朝食を摂っていた。

「でもクララとカロリーネって、顔は確かに似てるけど、背は全然違うしにおいも普通の姉妹ほどは似てないよ。何で？」

「3兄妹全員異母兄妹なんです。父が結構凄い恋愛遍歴の持ち主で、色んな女性に種植え付けたんですって。で、結果がコレ」

「そりゃあダメね。無節操だわ」

「こらー。元娼婦が言うなー」

「小遣い稼ぎだってば。うち貧乏だったんだから」

「……そんな女を彼女にした兄貴もすげえよ……」

そんな折、集会場にリーネが入って来た。

「何の話をしてたの？」

「別に。どうしたんだ？」

「……ちよつと話があつて。5分くらい時間ちょうだい」

「？まあいいが……」

集会場から出て、廊下の奥に行く。

「何だ？緊急か？」

「そうでもないよ。ただ、答えるまでに時間がかかりそうだから彼女は少し息を吐き、切り出した。

「お姉様。私と一緒に兄様の軍需会社を倒さない？」

私は思わず口元をほころばせた。

「もちろんだ。昔から何でも2人でやってきただろ？」

今なら思い出せる、妹との平穏で下らなくて楽しい日々。

もう戻らない、あの日々――。

「本当!？」

リーネはパツと目を輝かせる。

「それなら、お兄様を倒した後はヘルメスベルガー家の連中を根絶やしにしてやりましょう!」

あ、これはいかん。ちよつと苦しいぞ。

「……………うゝん…………。少し考えさせてくれ…………」

「えゝつ!!何でゝ!？」

あら。不満げらしい。

「最近一族の有象無象に嫌気が差していてな。和解すら考えているんだ」

「私達一族を滅ぼした奴らを許せるわけないでしょう!？ムリムリ!私よつぽどの事が無い限り、それこそガンジーとかマザー・テレサとか、そこら辺の人の魂に体乗っ取られたりしない限り、和解なんて出来っこない!!する気も無い!!」

妹は頭を振って、全力で拒否する。

「……………まあ、確かに気持ちは分からんでもないが、結果を焦らないでくれ。ただ、ヘルメスベルガー家の件については、和解しなくてもジャーナリストとして中立の立場でありたい。それだけは了承してくれ」

「うゝん…………。お姉様と戦わなくていいなら、それでいいけど…………」

どうも釈然としない様子で、彼女は立ち去り階段を上って行った。

――まだ彼女にあの話をするのは早いらしい。時期を待とう。

私だって、家族と言えるたった1人の人間を失うのは怖いのだろうか。

第四咲 告白花（後書き）

今回のキアラはおかしいです。

あと、カローリーネもいつの間にかハーレーに跨る事になりました。元々黒が好きって設定だったんですが、ある日突然「黒いライダースーツって、かっこいいよな……」と思い立ちまして、急遽「バイクぶっ飛ばすワイルドお嬢様」というワケのワカラン設定が出来上がったわけですね。

結構私の設定って見切り発車なので、頻繁にこういう事があつたりします。

さて、いきなりラスボス登場&キアラの秘密暴露です。

本当は彼女は単なる語り部のはずなんですが、気が付けば重要ポジションにいました。後半にはさらなる役割があります。お楽しみに。

まだ秘密はありそうですよ。

今回は随分と長い話になりましたね。

次は……さらに長くなるかもしれません。それじゃ、次回をゆっくりお待ち下さい。

第五咲 狩獵花（前書き）

今回はちょっとスケールでかいですよ。

第五咲 狩獵花

「Klara」

「その事件」の発端は、いつも通りのはずのテレビのニュースだった。^{ほんたん}

最近、どこの国营放送でもセントマイケル帝国『平和省』各庁大臣会議を報じている。それだけ、どの国も帝国の動きを警戒しているのだろう。

あるいは、ギネヴィア女帝の人気のせいかもしれない。

目はヘーゼルなもの、ゴージャスな長い金髪に白い肌、文句無しのプロポーションといういかにもお姫様な超絶美人。

所作は優雅で聡明な教養人。

冷静沈着で侵略にも否定的。さらに被侵略地域の言語や文化の保護に尽力している。

これで人気が出ないわけがない。20歳半ばにして既に2歳の姫の母だが、それでも男性ファンは多い。侵略された地域の住民も、彼女に対してだけは同情的である。アツシュさんでさえも、彼女ら親子には危害を加えないと宣言している。

総督に実権を握られているのが惜しい。

その日テレビを点けた時にも、彼女は各庁大臣に地域文化の保護を訴えていた。

『確かに現代に合わない風習もあります。しかしそれを無くす為だけに全てを捨てさせるのは、彼ら民族が積み重ねてきた歴史そのもののへの冒涇ではないでしょうか』

名前にそぐわず外交もとい対外侵略を率いている『友好庁』大臣がすぐさま反論する。

『いいや！！我ら西洋人の文化こそが最も高貴なのです！それを説き伏せる事のどこが悪いんです！？』

『それは100年近く前に既に否定された理論、骨董品ですわ。貴

方は魔女狩り、宗教戦争、植民地政策なども高尚な文化とおっしゃるのかしら？」

『確かに、植民地政策は宗主国の傲慢な行いでことごとく失敗しました。我々は同じ道をたどってはなりません』

『財政や公衆衛生を担当しており、唯一納得できる名前とされる『平等庁』大臣が女帝に助け船を出した。』

しかし、

『それでは我らの建国理念に反します！我々は、世界を統一し、欧州・北米以外の二流国あるいは三流国を一流の文化を持つ国とするために建国したんですよ！』

『そうですとも！世界解放の為ですよ！』

『民衆は、我々の崇高な理念に協力してしかるべきだ』

『もう種は世界中に蒔きました。我らの勝利は近い』

立法を司る『正義庁』、宣伝を行う『好意庁』、何か研究しているらしい『英知庁』、よく分かん『福音庁』の各大臣が、こぞつて女帝に野次を飛ばす。

その時、かつて保安官コンビが所属していた（今はやめる予定らしい。命令に逆らったら死あるのみという職場からはどう退職するのだろうか）、民衆の監視を務める『安全庁』の大臣が、不意にサツと手を上げた。

すると、彼を取り巻いていた保安官らが、女帝に向けて銃を突き付けた。

『なっ……！どういふつもりなのです！？』

ギョツとして後ずさる姫を見やり、男はニヤリと笑う。

『もし逆らうなら、貴女も反逆者ですよ。女帝陛下』

『——っ！——』

ギネヴィア女帝は、歯を食いしばり拳を握り締める。顔面は炎のごとく赤みを帯び、体は震えている。

『……もう勝手になさい！！』

ついには彼女は席を蹴り、ドレスを翻して立ち去ってしまった。

『あつ！ちよつ、陛下！』

引き留めようとしたのは2、3人で、あとはすつきりした面持ちだった。

ただ、そんな様子を、銀髪をオールバックにした眼鏡紳士風の男、クリフォード・アンダーアース（噂によると仮名らしい）総督は冷たく見据えていた。

彼はあくまで冷たく、ぼそりと呟く。

『それでは本題、「Psyche」の討伐についてだ』

画面の向こうにもこちらにも、ざわめきが起こった。

『「Psyche」といったら、あのアンドロイドの女共か！』

『向こうは機械人間とはいえ、妙齢の女性が多いんですよ？そんな連中の元に軍隊なんぞ送り込めば、我々に批判が集まります！』

『何で！？』

『私達は何もしていないわよ！？』

しかし、アッシュさんだけは、冷静だった。

『——ついに『平和省』も動き出したね……』

『しかし、奴らは危険です。我らが最悪の敵、「Olive Branch」と接触しており、我々に対して明確な敵意を表明しています。それに、「福音庁」が行なった調査によると、イタリアでは敵う者はいない戦闘集団だそうです。早めに手を打っておかないと、後々取り返しのつかない事態になるかもしれません』

『なるほど。それがこの資料か。だが、たかだか十数人、「Olive Branch」を含めてもせいぜい40人強という集団だ。それを倒すのに1000人は多すぎるのではないか？』

『念には念を入れてです。ナポリ近辺には力の強いマフィアも多いですから、奴らと組まれても対処できるような人数が必要でしょうし』

『海軍はいらんな。陸と、空を少しか』

『そうしましょう。爆撃機を導入すれば早く片付くでしょう。向こうが空の戦力を確保しているとは考えにくいですから。SEUの各

国も、我々の側にはつかないでしょうが、かといって向こうに協力
もしないでしょう』

『ただ、精鋭を導入すべきだろうな』

『そうですね。ただ、精鋭ばかり投入すると、万が一、絶対にあり
得ないでしょうけれど万が一、我が帝国軍が敗北した時に状況が苦
しくなるので、そこ辺りは調節しましょう』

総督と『友好庁』大臣の掛け合いの後、また別の話に入った。

リーネ達は呆然として、画面を虚ろに見つめていた。

ただ、イレ－ネさんだけが、冷静にアッシュさんと何やらひそひ
そ話していた。

第五咲 狩猟花（後書き）

すごく中途半端です。

明日出来たら更新しますね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7374u/>

鋼鉄花

2011年11月10日03時18分発行